黒髪の少女

あずさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒髪の少女

【Ｎコード】
Ｎ２０２１Ｑ

【作者名】
あずさ

【あらすじ】
黒髪に黒い瞳。異形と呼ばれる容貌の少女は村に捨てられていた孤児だ。蔑まれながら生きる日々で唯一の心の支えは三年前に出会った青年との再会の約束。けれど、王宮に下働きとして送られることになった彼女は彼との再会を待たずして村を去る。自分に価値を見いだせない少女と彼女以外に価値を見いだせない、周囲曰く変態、の青年のラブストーリー。
彼女は知らない。
彼がどれほど彼女を愛しているかを。

一部話の都合上ＧＬっぽい内容が出ますが、あくまでノーマルラブなお話です。

邪魔者の娘

1. 邪魔者の娘

「へえ。そんな話があるんですか」
「だったらあの娘に行ってもらえばいい」
「そうだな。あの娘ならば誰も文句は言わん」
「まあ、レオンあたりが煩いかもしれんがな」
「あいつは今、丁度町に行ってて留守だし気にすることないだろ」
「それに他にもっといい娘をあてがえばいい」
「そうだな！これでレオンも目を覚まして村長の娘さんのマリンお嬢様に」
「おい、余計なことは言うなよ」
「あ」
「とにかく！皆の意見はわかった。あの娘が少しは役に立つんだ。皆賛成でいいな」
「もちろんです」

会議は始まってすぐに終わった。
村長の家の外で皆の話を聞いていた私は寒さ以外の悪寒も走って、身を震わせた。
でも、私に皆の意見を覆すような権利はない。
それに、両親がおらず、幼いときにこの村に捨てられた私の面倒を見てくれていた薬師のおばあさまもすでに五年前に他界している。
おばあさまに薬のことは教えられていたが、この村にはすでに別の薬師が移り住んできている。
それに、異形の姿をした私の作った薬など皆飲みたくないだろう。

つまり、私は天涯孤独の村のやっかいもの。
（だから、きっと今まで育ててもらった恩を返すにはこれしかないんだわ）
冷静にそう判断できる。
でも、遠い見知らぬ地へ売られる未来を考えると不安と恐怖で涙がこみあげてきた。
「うっ」
嗚咽がこぼれる唇を両手で押しつぶす。
聞いていたことがばれると礼儀がないとまた打たれてしまう。
私は口を押えたままその場から走り去った。
村の夜道は暗い。
その中を一人走り、村の中心地から少し離れた場所にある家へと向かう。
ここで泣いていたら人の目につく。
せめて、慣れ親しんだ質素だけれど大切な家で少しでも長い時間を過ごしたかった。
私の家は家といっても馬小屋みたいに単純な造りだけれど。
でも、１７年もこの家で生きてきた。
思い出の全てがここに詰まっている。
「きっと皆は明日の朝にやって来るでしょうね」
ため息をつく。
けれど現実は変わらない。
今晩のうちに大切なものをまとめておいたほうがいい。
数着の着替えや下着を畳み、大きめの鞄に入れる。
裁縫道具や薬、そして。
「これだけは絶対に持っていかないと」
ベッドの下に隠してある、ボロボロになった一冊の本と小袋を取り出す。
この二つは私の宝物。
二つを抱きしめればあの遠くて優しい出会いを思い出す。

今から三年ほど前。

『君は変わっているね』

森の奥の泉でそう言って感情の読めない青い目で、でも、私をまっすぐに見つめてくれた綺麗な男の人。

私なんかをまっすぐに見てくれるなんて、

『あなたの方が変わっているわ』

そう言って笑ったら、青い瞳が驚いたように大きく見開かれた。
あの時の驚いた顔が忘れられない。
そして、冷たい目よりもそっちの方がずっといいわと褒めると、何故かソワソワと落ち着きなく動揺していた。
それから、数日間。
彼とは早朝や仕事の合間に何度か会って話をした。
村人は誰も彼の存在を知らなかったし、彼はいつも泉にいたから、私は彼を幻か妖精かと思っていた。
でも、彼はれっきとした人間だったみたい。
出会ってから数日後のある日。
彼は私に一冊の本と指輪を渡した。

『僕と次に会うまでには勉強くらいしておけば』

それは別れの言葉を意味していた。
その翌日から私は彼を見なくなった。
あれから、三年。
彼とは一度も会っていない。

「本当は待っていたかったけれど」
ぽろりと瞳から涙がこぼれた。
「ごめんね」
私はもう待っていられない。
唯一の夢さえも、もう、抱くことはできない。
最後にもう一度だけでいい。
あなたに会いたかった。
私は宝物になった本と小袋に入った指輪を抱きしめて泣いた。

邪魔者は都へ

翌日。
ざわざわとした人のざわめきがした。

「来たみたい」

私の独り言に答えるみたいに

ドンドン

扉を叩く音が響いた。

「はい」
きいっと音を立てて扉を開けば、村長さんをはじめとした村の人たちが集まっていた。
「アリシア。おまえに良い知らせがある」
「はい」
「王宮で丁度下働きが募集されていてな。娘一人当たり、作物5俵ぶん免税される」
「村のやっかいものがこうして役にたつことが出来るんだ。嬉しいだろう？」
「おまけに王宮で働けるんだぞ。大出世だ」
「行ってくれるな？」
「そんなの聞くまでもないわ。ねぇ、アリシア？」
（マリン・・・）
彼女は村長の隣でにやりと笑う。
その笑みで私はようやく気づく。
（これはマリンの差し金なんだ）

三年ほど前に突如この村にやってきたレオンは、何故か私のことをよく気にかけてくれた。
この村に私を人間としてまともに扱ってくれる人はいなかったから、私とレオンが仲良くなるのに時間はかからなかった。
彼は私にとっての唯一の友達となり、また、無知の私に文字やこの世界のことなどたくさんのことを教えてくれる先生にもなった。
でも容姿に優れ、どこか気品もあり、それでいて人懐っこい笑みもする彼は村でも一目置かれる存在。
そんな彼と私が仲良くすることを村の人たちが快く思うはずもない。
そして何よりも。
この村で絶対的な権力を誇る村長。
その愛娘のマリンがレオンと結婚することを望んだ。
でも、レオンはそれを断ったみたい。
（だから、マリンは彼と仲がいい私を追い出すことにしたんだわ）
レオンと私はそんな関係ではないのに。
私を追い出したとしてもレオンの心は彼女のものにはならないのに。
（でも）
私が去ればレオンも私なんかに構わなくて良くなる。
そうしたら、彼自身の幸せを探せるかもしれない。
（ご恩返しにもなるし、きっとこれが一番いい道なんだわ）
「はい。行かせて頂きます」
私の返事に村長がこくりと頷く。
「すぐに用意しなさい。馬車はすぐに出る」
「はい。用意が済んだらすぐに行きますね」
私の返事に皆が眉をひそめる。
「私たちが連れて行く。大した荷物もないだろう。すぐに用意しなさい」
ぴしゃりと言い捨てられる。
（そっか）
私が逃げないように監視しているんだわ。

くすり。
思わず笑ってしまう。
逃げる場所なんてどこにあるというのだろう。
（ううん。レオンはきっとかばってくれるわ。でも、私は彼にこれ以上迷惑をかけたりしないわ）
それぐらいの分別は持っているつもりだ。
「わかりました。少しお待ちください」
すでにまとめてあった荷物に少し物を足す。
荷造りはそれで終わり。
最後に家の中を見渡した。
おばあさまと過ごした慎ましいけれど幸せな日々も。
あの人と出会って、なんだか落ち着かない夜を過ごした日々も。
レオンにたくさんの本を読ませてもらった温かな日々も。
もう。
返らない。
「早くしなさい」
苛立った村長の声が私をせかす。
私は振り切るように、愛しい我が家に背を向けた。
ばたん。
後ろで戸が閉められる音がする。
「行くぞ」
村長たちに引きつられるまま、村の入り口へと歩き出す。
田を横切り、皆が住む家々を横切り、そして、入口へとたどり着く。
小さな村。
けれど、私の世界の全てだった村。
入り口には小さな幌馬車。
ここから町まで行き、そこで、税の徴収が行われる。
その後に町から都へとまた送られるのだろう。
「早く乗らんか！」
「もたもたするな」

「まったく、最後の最後までとろくさいんだから」
がたんっ
幌馬車の中に突き飛ばされる。
「っ」
「逃げると困るからな」
「えっ」
村の男性に倒れこんだ体を押さえつけられる。
「やめてください！逃げたりなんてしません」
必死に訴えるけれど、村の男の人は私の両腕を麻縄で後ろ手に括り付ける。
「っ」
痛みに眦に涙がたまる。
「ではな。今までの恩を忘れず、都でしっかり働くのだぞ」
村長がそういうと、幌馬車の帆が下ろされた。
そうして私は。
最後に村をもう一度見ることなく、町へと送られた。

都にて

都に来てひと月が過ぎた。
皿洗いのために食堂の隅へと入った私は盥に手を付けたとき、
「いたっ」
思わず手を押さえた。
「大丈夫？」
「ええ」
声をかけてくれたのは同僚のミーシェ。
心配をかけたくなくて慌てて笑顔を返したけれど、彼女は心配そうに私の手を取る。
「切り傷じゃない！一体いつ切ったの？」
「朝の水汲みの時にちょっと」
「水汲み？アリシアの仕事じゃないでしょう」
「アンネさんに言われたの」
アンネさんは私たち下働きをまとめる人。
「あの人はまた」
憤ったように眉を寄せる優しい同僚。
私は思わず微笑んでいた。
「ミーシェは本当に優しいね」
私の言葉にミーシェが綺麗な瞳を大きく見開く。
そんなミーシェに私はふふっと笑った。
「アリシア？私のどこが優しいっていうのよ」
「さあ。どこでしょう？」
「あ！ちょっとからかったわね」
「ふふ」
笑って私は残りのお皿を洗ってしまおうと手を伸ばす。
でも、

「こら！そんな怪我を見せといてよくもまあ私の隣で水仕事なんてしようとしてるわね。いい度胸してるじゃない」
がしっと私の腕を掴む。
「ミーシェ？」
「私が洗う。貴女は拭く。オッケー？」
「でも」
水仕事は手が荒れる。
「私が手を怪我したときに代わってくれればいいから。今は持ちつ持たれつ。いい？」
「ありがとう。ミーシェ」
「どういたしまして」
にこっと満足げに笑うと、ミーシェはてきぱきと皿洗いを再開する。
その手際の良さに、私は慌てて布巾を手にして洗い終わった皿を受け取った。

そう。
都に来て一月。
村を出て約二か月。
城の下働きの仕事は忙しくて辛いことも多いけれど、私には同室の同僚ミーシェができた。
今までずっと一人ぼっちだったから、こうして話が出来る同年代の、まるで、友達のような存在ができてとても嬉しい。
ミーシェは何でも器用にこなすし、器量もとてもいい。
でも下働きの粗末な服とぼさぼさの頭が彼女のせっかくの美しさを隠してしまっている。
（勿体ないわ）
これほどの美貌だ。
きちんとすればきっと彼女を望む人であふれかえるだろう。
それに。

（私には勿体ない人）
他の同僚たちは私の容貌を気味悪がって近寄らない。
私と仲良くしているミーシェも、巻き添えを食っている。
彼女ならきっと同僚たちとも仲良く出来るのに。
（私なんかと一緒にいるから）
ごめんなさい。
心の中で何度も謝るけれど、彼女に面と向かって自分を捨ててほしいともいえない。
そんな自分が嫌になる。
（ミーシェ。どうしてこんなに汚い私と仲良くしてくれるの）
聞きたい。
でも、絶対に聞けない。
この関係を失いたくない。
「ごめんね」
「？アリシア？」
もう一度謝った私にミーシェは案じるような目を向ける。
でも、私はこんな汚い心を見てほしくなくて、笑顔でそれを遮った。
「ううん。なんでもない。それよりほら。早く片付けてしまいましょう」
「そうね」
私の心を察してくれたのか、ミーシェも笑顔を浮かべると私たちは皿洗いを再開した。
ごしごし
かちゃん
ごしごし
かちゃん

しばらく、皿を洗う音と直す音が静かに響いていたけれど、
「そうだわ。アリシア。知っている？」
「何を？」

「今日は新しいお妃様がいらっしゃるのよ」
「新しいお妃様？」
「うーん。性格にはお妃様候補の方なんだけど。なんでも絶世の美女で陛下が異国で見初められたそうよ」
「まあ。きっととてもお綺麗な方なのね」
「ふふ。アリシアも女の子ね。うっとしている」
私は真っ赤になってしまった。
恥ずかしい。
私みたいな容姿の人間がお妃様の美しさをうらやましがるなんて、恥知らずにもほどがあるわ。
「ごめんなさい」
「ちょっと。どうして謝るのよ」
「私、恥ずかしいわ」
なんだか涙まで浮かんできた。
そんな私にミーシェが慌てたようにおろおろと石鹸だらけの手を振る。
「どうしたのよ、アリシア」
「私、一瞬でも綺麗に生まれたかったなってお妃様のことを羨ましく思ってしまったの」
「貴女もお妃様になりたかったの？」
その言葉に私はぶんぶんと首を横に振った。
「そんな恐れ多いこと考えてないわ！」
「ちょっとアリシア。そんなに勢いよく首を振らないの。取れてしまいそうよ」
「だって、そんな恐れ多いこと」
「うーん。つまりは綺麗に生まれたかったって？そんなの女なら誰でも思うことよ。恥ずかしくなんてないわよ」
「そう、なの？あの、ミーシェでも思ったりするの？」
「当たり前よ」
「でも、私なんかが」

「ちょっとアリシア。貴女気づいてないの。貴女とても綺麗よ」
「ふふ。ミーシェったら」
「ちょっとなに笑ってんのよ。私は本気で言ってるんだからね」
「ふふ。ありがとう」
「・・・ったく、そういうとこ、ほんとに強情よね。っていうか、お妃様になりたいって思ってるならすごくいいことだと思ったんだけど」
「？ミーシェ、何か言った？」
「いーえ。なんでも」
「ふふ。さあ、続きをやってしまいましょう」
「はいはい」
「ちょっとおまえ！」
急に聞こえた甲高い声。
私は思わずぴっと背筋を伸ばし、慌てて振り返る。
そこには仁王立ちしたアンナさんがいた。
「何暢気にしゃべってるんだよ！皿洗いが終わったらすぐに花を摘んで来いって言っておいただろう。花はまだなのかい？！」
「す、すみません」
「ああ、もう。本当にとろい子だよ。そこはもうミーシェに任せてバラを摘んでおいで」
「もう終わるから終わったら私が」
バラは棘が鋭いから、摘むときに怪我をしやすいし、
それに、摘んだらすぐに高貴な方々が傷つかないように刺抜きをしないといけない。
ミーシェはそれを気にしてくれたのだろう。
けれど、ミーシェの提案にアンナさんは思いっきり眉をしかめた。
「裏方はその子みたいに表では使えない子がすればいいんだ。余計な気を使ってないであんたはそれをとっとと終わらせてメイドの仕事を手伝うんだ」
「そんな」

「ミーシェ。いいから」
「何をこそこそ言ってるんだい！お妃様がいらっしゃるまでに王宮中の花を取り換えるんだ。早くしな！」
「はい！ミーシェ。ごめんね。後はよろしくお願いします」
小さくミーシェに謝って慌てて近くに置いておいた花かごとハサミを手に持つ。
そして、裏口からバラ園へと急いだ。

薔薇園の女神

王宮で飾るためのバラは城の敷地内にある庭園で育てられている。
城から少し離れたところにあるため、庭師以外はほとんど人は訪れない。
今は庭師たちも庭園の整備にあたっているのだろう。
栽培所には誰もいない。
私は今を盛りに咲く花やあと少しで満開を迎えるだろう花などを選別しながら摘んでいく。
「っ」
気をつけてもバラの棘はするどいし、棘を抜く作業はどうしても手に傷を作ってしまう。
「また、ミーシェを心配させてしまうわ」
「私も心配だわ」
「！」
聞こえた声に、私はびくっと肩を揺らした。
慌てて後ろを振り返る。
「え・・・」
そこには女神様が立っていた。
日の光を浴びてキラキラと輝く金色の髪。
青い瞳は空のように澄み渡り、切れ長の瞳は妖艶。
ゆったりとしていて、布が幾重にも巻かれた異国の衣裳、カプチェを来ている。
「貴女は・・・」
かすれた声で呟けば、女神のような女性はふわりと微笑んだ。
彼女は音も立てずに私のそばまで近寄ると座り込んでいた私に視線を合わせるように腰を下ろし、そっと私の唇に長い指をあてる。
「しいっ。その質問はまた今度」
諭すように言われて、私は思わずこくこくと首を横に振る。

そんな私に女性は満足そうにふわりと微笑む。
そして、私の両手を取る。
「だ、だめっ」
思わず手を引いた。
だって、こんなにも綺麗な人に私の血がついてしまったら。
拒絶した私に女性は悲しそうに眉を寄せる。
「私のことが嫌い？」
「違います！あの、ただ、私の手、汚れていますし、私なんかに障ったら貴女まで」
「・・・」
女性は静かに私を見つめる。
「すみません」
いたたまれなくなって謝る私に。
「あと少しだから」
「え」
目の前に女性の顔が迫る。
けれど、途中で女性はぴたりと動きを止め、そして、あっけにとられていた私の両手を掴むと
「あ」
止める間もなく女性の唇が私の手へと落ちていた。
「やめてくださっ」
止めようとしたのに、
「きゃあっ」
女性の舌が私の手を舐める。
ぞくっ
背筋が震えた。
「どうして」
事態についていけない。
それなのに、女性の生暖かい舌が私の手を、まるで癒すように傷口を優しく丁寧に舐めていく。

（どうして）
皆、触れることさえ嫌がる異形の身なのに。
パニックになって、何も考えられない。
身をよじっても、手を引いても、何故か彼女の手から逃れられない。
（どうしたらいいの？！）
もう本当に泣きそうになったとき。
くちゅ
水音を残して、ようやく唇が離される。
私は泣きそうな目で彼女を見た。
でも、女性は感情の読めない眼で私をじっと見つめると、すっと立ち上がる。
そして、
「バラは摘まなくてもいいから。いいわね」
逆らえないような強い瞳でそう言われ、思わずこくりと頷いてしまう。
「いい子」
女性は満足そうに微笑む。
そして、
「もう少しだよ」
そう言って名残惜しむようにそっと私の頬を撫でると、そのまま優雅な足取りで去って行ってしまった。

後に残されたのはむせ返るようなバラの香りと。
信じられないほどの早鐘を打つ胸の鼓動の音だけ。

二つ目の扉が閉まるとき

ふらふらしながら料理場の裏口から中に入ろうと取っ手に手をかけたとき、
「ちょっと！どこに行っていたんだい？！」
「アンナさん。どうかしたんですか」
「どうかしたのはあんたの方さ！お妃様が黒い目と黒い髪を持つ女を召し出せって言ってきたのさ」
「え」
「何をしたのか知らないけどあんた、とっとと着替えるんだよ」
そう言ってメイドのお仕着せを押し付けられる。
「どうして」
訳がわからない。
私たち下働きはメイドにもなれないはずなのに。
戸惑う私にアンナさんは眉を寄せる。
「そんなの私だって知るもんかい。でも、もしかしたら、いくら下働きとはいえこの城にあんたみたいな異形がいるのがお耳に入ってお怒りになっているのかもしれないね」
「そんなっ」
「私に言ったって仕方ないだろ。それより早く用意するんだよ」
アンナさんは私を突き飛ばすとそのまま料理場に入ってバタンと戸を閉めてしまう。
「うそ・・・」
また、私は居場所を失うのだろうか。
（ミーシェ）
たった一人できた、私の宝物のような同僚。
（友達になりたかった）
目頭が熱くなった。

でも、私には他に行き場所がない。
重い足を引きずるようにして、私は着替えるために部屋へと向かった。

ドンドン！
「アリシア、用意はできたか」
低くて冷たい声がそう尋ねる。
私は慌てて戸を開けた。
扉の外にいたのは城の兵士だった。
彼は私の姿を見ると頭の先から足の先まで視線をたどらせ、
「行くぞ」
不愉快そうに眉を寄せると私の返事を待たずそのまま歩き出す。
その背を追いかけて歩を進めれば、また、背で扉が閉まる音がした。

美貌の側室

下働きようの宿舎を抜け、裏道を通り、王宮に入る。
王宮の中に足を踏み入れたのは初めてだった。
下働きの私たちは、高貴な方々の目には決して留まらぬように隠れるようにして作られた場所で仕事をしているから。
（なんて綺麗なところなのかしら）
思わずうっとりとため息をついてしまう。
こんなに美しいところで命を落とせるならそれもいいかもしれない。
（たくさんの人に不快な思いをさせることしか出来ない私にしては、幸せすぎる最期だわ）
まるで夢の国に迷い込んでしまったみたい。
ただ、兵士の歩みだけが現実。
けれど、それも終わりを告げる。
「ここで待て」
兵士は金で彩られた大きな扉の前でそう言って足を止めた。
そして、その両横に立っていた美しい二人の兵士（私をここに連れて来た人よりもずっと綺麗な甲冑を身に付け、お顔もとても綺麗なお二人だわ）に声をかける。
「連れてきました」
二人の兵士は私をじっと見つめると、静かに首肯する。
「確かに。おまえはもう下がれ」
「はっ」
かっと甲冑を鳴らして敬礼をすると、兵はそのまま去って行った。
彼が完全に見えなくなったとき、
「アリシア様ですね」
「！」
びくっと肩を震わせる。
そんな私の反応に綺麗な兵士の方は困ったように眦を下げた。

「すみません。驚かせるつもりはなかったのですが」
「も、申し訳ありません！」
必死で頭を下げる。
（どうして、いつもこうなんだろう）
こんなにも綺麗な人にまで不快な思いをさせてしまうなんて。
そんな私の肩に、そっと手が置かれる。
（き、斬られる？！）
思わず目を瞑りぎゅっと両手を胸の前で握りしめる。
「アリシア様。どうか怯えないでください」
優しい声がとても近くで聞こえた。
覚悟した衝撃がなくて、私はその声に導かれるように瞳を開く。
とても綺麗なお顔が近くにあった。
なんと、兵士のお一人が私の足元に足をつき、私を下から覗き込んでいらっしゃったのだ。
「！？」
「アリシア様。ここにいるものは誰も貴女を苦しめたりはしません。ですから、どうか落ち着いてください」
ふわりと微笑む兵士の方は淡い栗色の髪に瞳は新緑。
笑顔を浮かべるお顔は少女のように柔らかな顔立ちをされている。
「どうして私の名前を？」
恐る恐る尋ねると、兵士の方はにこりと微笑まれ、
「知っているんです」
返事になっていない答えを返された。
（でも、私のような異形は私だけだもの。名前を知っていてもおかしくないのだわ）
心の中で納得する。
「アルティウス。彼女はまだなの？」
部屋の中からぞくっとするような色気のある声が聞こえた。
けれど、その声はどこか苛立っている。
「ふふ。私たちの主は待ちきれないようですね」

膝をついていた兵士は可笑しそうにそう笑うと、そっと立ち上がった。
どうやら、彼がアルティウスさんらしい。
「ただ今、お連れします」
そう言うと、彼はもう一人の兵士さんに視線を送った。
もう一人の兵士さんは赤い髪に赤い瞳をした凛々しい顔つきをしている。
どこか女性らしさを持ったアルティウスさんに対して、こちらの方は肩幅が広く、精悍な顔つきをしていて男性らしい。
彼はアルティウスさんに答えるように小さく頷くと、扉の取っ手に手をかけかけ、そして、ちらりと私を見た。
私は慌てて姿勢を正す。
「グレンだ」
「え」
叱責がくるのだと身構えた私に彼はそう名乗った。
（名乗った？）
どうして私なんかに。
「グレンに先を越されてしまいましたね」
「！？」
アルティウスさんが私の手をそっと取っていた。
「アルティウスと申します。アルティと呼んでくださいね」
そう言って形のいい唇を私の手に寄せようとし、
「調子に乗るな。殺されるぞ」
ぐいっとグレンさんがいたずらをした子猫を捕まえるよに、アルティウスさんの首根っこを掴んでいる。
「ふふ。ちょっと悔しかったものですから」
「・・・」
「アルティウス、グレン」
苛立った声がまた中から聞こえた。
グレンさんが眉を寄せた。

「このままだと扉を蹴破ってくるな」
「仕方ありませんね。今、お連れしますよ」
肩をすくめると、アルティウスさんがにこりと私に微笑みかけてくださる。
「これから苦労するかもしれませんが、嫌になったらいつでも私を頼ってくださいね」
「こいつは止めておけ。・・・俺にすればいい」
グレンさんの言葉にアルティウスさんが驚いたように彼を見たけれど、すぐに表情を改めると彼は今度こそ扉を開けた。
「アリシア様をお連れいたしました」
扉を開けたすぐそこにいたのは。
「貴女は」
瞠目した私に、
「また会えたね」
そう言って、バラ園の女神様は微笑んだ。

優しい日々とお人形

「アリシア。これが好きだったでしょう？」
そう言ってミカ様は桃色のお菓子を私の唇に運ぼうとなさる。
私は慌てて体を引いた。
「これはミカ様のために作られたお菓子です。私が頂くわけには参りません」
ミカ様はきょとんと小首を傾げられる。
「何を言っているの？私のものは貴女のものでしょう？」
「な、何をおっしゃっているのですか。そんな恐れ多いこと！」
あまりにも当たり前のようにおっしゃるから危うく納得しかけたけれど、
（これで頷いたら不敬罪もいいところだわ。首をはねられても文句は言えない）
「何を考えているの？」
いつの間にか人一人分あった距離をするりと詰め、ミカ様は私をソファに押し倒すように体を寄せられる。
ちなみに、私が恐れ多くもミカ様と同じソファに座らせて頂いているのは、そうしなければミカ様が床に直接座られるから。
ミカ様と初めてお会いしてからすでに一週間。
お妃様とお呼びしたら、ミカと呼んでと言われ、恐れ多いと辞退すれば、丸一日ご飯を抜かれ、ミカと呼ばなければこれからも食事をとらないと脅された。
それ以来、私は恐れ多くもエミカ様をミカ様とお呼びしている。
それに。
恐れ多いのはそれだけではない。
ミカ様は私が働くのを良しとせず、部屋の掃除などはすべて他のメイドにやらせている。
私の仕事といえばせいぜい、運ばれてきた食事をテーブルに並べた

り（ミカ様は私のぶんの食事も一緒用意させており、私は恐れ多くもミカ様と同じ内容の食事をさせて頂いている）、ミカ様にお茶をお入れしたりすることだ。でも、それさえも、ミカ様ご自身が手伝ってくださる。いいえ。むしろ、私を座らせてミカ様が私に食事の用意をしてくださることの方が多いかもしれない。
部屋は下働きの部屋からミカ様のお部屋に隣接された侍女用の部屋となった。
日中はミカ様が本を読んでくださったり、勉強を見てくださる。
他にも荒れた手に効く薬を手ずから塗ってくださったり。
（振り返ってみると本当に恐れ多いことだらけだわ）
私は体中の血がさあっと引いていくのを感じた。
いくらミカ様が望まれたこととはいえ、どれほど厚顔無恥で無礼な振る舞いをしているのだろう。
（でもミカ様にとってはお人形遊びのようなものだから）
こんな日がいつまでも続くわけがない。
（きっと飽きられる日がくるわ）
ミカ様は近衛のお二人、アルティウスさんやグレンさんにはとても冷めていらっしゃる。
あんなにも素晴らしいお二人であの態度なのだから、私のような異形の醜い女など、飽きればすぐに捨てられてあっという間に忘れられてしまうだろう。
ツキン。
胸の奥が痛い。
けれど、その痛みから目を背ける。
悲しいなんて思ってはいけない。
痛みになんて感じてはいけない。
この夢のような一時に幸せを感じてはいけない。
これは私に与えられたちょっと変わった仕事なだけ。
優しくされていると勘違いしてはダメなのだ。
（この優しさは私のものじゃないもの）

人形へ向けられる他愛無い遊びの一環なのだ。
だから。
（感謝だけを胸に）
訪れる終わりの日を静かに待てばいい。
「アリシア？」
そっと頬を撫でられる。
白い手袋で覆われた手は冷たい。
「どうしてそんなに悲しい顔をしているの」
ミカ様の方が辛そうに眉を寄せられる。
「悲しい顔などしておりません」
「無理して笑わないで」
「・・・」
「アリシアはいつもそうだね。甘いお菓子に喜んでくれたと思ったら、次の瞬間にはこの世の終わりみたいに思いつめた目をしてる」
そんなにも顔に出していたのだろうか。
だとしたら、心を砕いてくださっているミカ様になんて失礼な態度をとっていたのだろう。
「申し訳」
「謝らないで」
そっと唇を押さえられる。
「君の笑った顔が見たい」
「ミカ様」
「甘いお菓子に年相応に喜んでくれたらとても嬉しい。勉強のときに見せてくれる真剣な顔も可愛い。夜眠そうにしている顔なんて食」
「はーい！ミカ様。アリシア様がつぶれてしまうでしょう？」
ぐいっとミカ様の体が引き戻される。
いつか見たアルティウスさんのようにミカ様はグレンさんに捕まえられていた。
「最近タガが外れているな」
「まあ、この方にしては我慢した方ですよね」

「？」
「ああ、アリシア様は気にしなくていいんだよ」
にっこりと笑うアルティウスさんの顔は笑顔なのに迫力がある。
三人はよく私にはよくわからない話をなさる。
そして、私には気にするなといつもおっしゃる。
（きっと私が無知だからね）
仲良くなるなんて恐れ多いことだけれど、せめて親しくさせて頂いている間くらいは、少しは認めて頂ける人間になりたい。
そう思って一生懸命本を読んで勉強しているのだけれど、お三人に敵うわけもない。
「アリシア。口を開けろ」
グレンさんの低くて威厳のある声に言われて私は思わずぱかっと口を開けた。
もぐ
「旨いか？」
口の中に広がる甘さとイチゴの香り。
（飴だわ）
こくっと頷く。
「そうか」
グレンさんは満足そうに微笑んだ。
（あ、笑った）
グレンさんはいつも静かな表情をしていて、あまり表情豊かではない。
でも、たまに見せてくださる微笑みはとても優しい。
なんだか、私の心までふわりと温かくなるのだ。
「グレン」
不機嫌そうなミカ様がグレンさんを睨んでいる。
（私がお仕事中に主の許しもなくお菓子を頂いたから）
慌てて飴を飲み込もうとしたけれど、
「アリシア。違う」

それよりも早くにはっと何かに気づいたようにこちらを向いたミカ様が私の手を押さえた。
「怒っていないから。ゆっくりと食べて。喉に詰まったら大変だ」
どうして私が飲み込もうとしたのがわかったのだろう。
けれど、ミカ様のお優しい言葉に私は頷いた。
「美味しい？」
グレン様と同じ問いをなさるミカ様に私は戸惑いながらこくりと頷いた。
「ならいいんだ」
ミカ様は私の頭を優しく撫でてくださる。
この、黒い髪を。
そのたびに私はミカ様がされている白い手袋を思う。
この白い手袋がミカ様を守ってくださっている。
だから、安心して触れられることが出来る。
そう、思うのに。
時々。
本当に時々だけれど。
ミカ様が私の前では決して手袋を外されないことが、胸の奥をざわつかせることがあった。

密やかな攻防（前書き）

視点が変わります

密やかな攻防

「うちの主、最近ご機嫌ですよね」

主人を前にしてくすりと笑う部下に、美貌の主はくすりと笑い返す。

「ああ。とても機嫌がいいよ。あと少しだからね」

「長かったな」

「短気なご主人様にしてはすごく頑張った方ですよね」

「ここまで本気で完璧に欲しいと思ったものはないからね」

「ここまで頑張れる人間だとは思わなかった」

「本当に。外聞なんて微塵も気にしないくせに、彼女に関してだけはすごい気の配りようですよね。といいますか、気を配ることが出来たんですね」

「出来るよ？彼女に関してだけ、はね」

「それでもいいと思えるほどの前科ですものね」

「ああ。感動を覚えさすほどだ」

「ところで、そんな努力を水の泡にするような間抜けはいないだろうね」

主のひやりとした、けれど、本気の問いに、二人はすっとふざけた雰囲気を消した。

「はい。全ては順調です」

「決行の日、明日には間違いなく全てが手に入るでしょう」

二人の返事に、主は満足そうに頷く。

「そうだね。そんな感じだ」

遠くを見つめるような、どこも見ていないような不思議な瞳でそう返事をする主は、きっと、自分たちの報告など聞かなくても、自分たち以上に現状を把握しているのだろう。
彼にはそれだけの力がある。
能力がある。

「彼女を苦しめた全てが憎いよ」

主の瞳を夕日が照らす。
まるで血のように赤く、鈍く光る。
ぞっと背筋に悪寒が走った。
けれど、彼の発した言葉に、今の二人は思わず同意してしまいそうになる。
柔らかな微笑み。
周囲への気遣いにあふれた優しい心。
そして、自身を傷つける無意識の刃。
彼女から彼女の価値を奪った全てを憎く思う気持ちは、彼らの心の内にもそっと募っている。

「ダメだよ」

そんな二人の心の内を知っているかのように主がこちらを向いていた。

「彼女は君たちのものじゃない」

くすりと笑った瞳は狂気で満ちている。
けれど。

「選ぶのは彼女だと思いますよ」
「彼女の趣味はそこまで悪くない」
反抗するくらいには彼らは彼女を想っている。
それに。
「あなたみたいな変態に、彼女を渡すのは無理です。心的に」
「可哀そうだ」
「そうだね。君たちは怖いもの知らずだったんだった」
だから使ったんだったね。
と主は笑ったけれど、瞳の奥は独占欲に燃えているのを、二人は見逃しはしなかった。

密やかな攻防（後書き）

お気に入り登録してくださっている皆様。
そして読んでくださったいる皆様。
ありがとうございます。
これからもよろしくお願いいたします。

秘密の、後で

ミカ様のお世話をさせて頂いて早一月。
ミカ様は未だ私に飽きられず、私は部屋から一歩も外に出ていない。
切り傷だらけで、荒れていた私の手はまるでお姫様のようにつややかになってしまった。

（ミーシェ）

ミーシェは今頃どうしているだろう。
私がいなくなったことで仕事を押し付けられたりはしていないだろうか。
いや。
むしろ、新しい下働きがやってきて、今頃は彼女と仲良くやっているかもしれない。

「その花、気に入らなかった？」
「ミカ様」

いつもほとんど外出なさることのないミカ様。
でも、今日は朝から出かけられていたはずなのに一体いつの間に帰られていたのだろう。

「おかえりなさいませ」

いつも同じ時間を過ごさせて頂いているミカ様がいらっしゃらなくて本当は少し淋しかった。
だから、嬉しくて思わず安堵に頬が緩んでしまう。

「・・・うん。ただいま」
頬を少し朱に染め、ミカ様は視線を逸らしてそうおっしゃった。
（何かあったのかしら）
不機嫌というのともどこか違う、まるで照れたかのようなお顔つきに、私は心の中で首を傾げる。
「それより、アリシア。何か気になることがあったの？」
「あ」
ミカ様に申しあげるようなことじゃない。
でも、お尋ねになったことに答えないのは失礼だ。
（どうしよう）
言葉を探していると、
「言わないと・・・お仕置きだよ？」
「！」
「ああ。痛いことじゃないから大丈夫。私が君を傷つけるわけないだろう？」
「は、はい。ミカ様はとてもお優しい方ですから」
「ふふ。そうだよ。私は君にだけ優しいんだ」
「？」
なんだかニュアンスが違うような気がしたけれど、ミカ様がとても満足そうなので私はほっと胸をなでおろした。

「それで？何か気になることがあったんだよね。君の心を一時でも奪う存在。ふふ。教えてくれるよね？」
「えっと」
なんだか怖い感じがするのはもちろん気のせい、よね？
「アリシア」
「そ、その」
その時。
トントン。
扉が叩かれた。
「・・・どうしたの？」
「王の側近の方がいらっしゃいました。すぐに御前に参上するようにと」
ミカ様はため息をつくと、面倒、と小さくつぶやいたけれど。
「わかった。行くよ。それじゃあ、アリシア。後でちゃんと教えてね」
そう言うと、私の頬を撫でてミカ様は扉へと向かう。
まるで見えていたみたいに扉が開けられる。
「エミカ様。申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします」

王の側近の方はミカ様に頭を下げると案内のため、先に歩き始めた。
その時、その方は一瞬部屋の中にいた私を視界に止め、次には眉を顰められた。

びくっ

久しぶりの視線に体が震えた。

（こんなのおかしい）

こん目をされるのは当たり前のことなのだ。
これが当たり前の反応なのだ。

（それなのに、私は）

「部屋の中を覗くなんて、首を刎ねられたいの？大臣殿」

底冷えのするような冷たい声を発せられたミカ様の背がすっと私の視線を遮る。

（ミカ様？）

まるで大臣様の視線から私をかばってくださったようにうぬぼれてしまいそうになる。

（そんなはずないわ）

「い、いえ」
「陛下がお待ちなのでしょう。早く案内しなさい」
「は、はい」

カツカツと大臣様の足音が響きだす。
その音に私は慌てて扉まで駆け寄った。
「行ってらっしゃいませ」
そう言って頭を下げようとしたとき、ミカ様が振り返った。
後でね。
声に出さず、秘密を囁くように唇だけが言葉を形作る。
（後で？）
何かがひっかかったけれど、私は、足音が消えるまで頭を下げてお見送りした。

秘密の、後で（後書き）

一度書いたのに間違って消してしまいました・・・
書き直したけれど、甘いところがたくさん消えたまま・・・

朱色に染める社交辞令

足音が去るまで頭を下げ続け、頭を上げたとき。

「アリシア様は丁寧だな」

ぽんっと頭を撫でられる。

アルティウスさんはミカ様と一緒に行かれたから、グレンさんだけが残っていた。

ちなみにグレンさんやアルティウスさんは二人きりのときでも、ミカ様に言われた通り、私のことを様付で呼ぶ。

どうしてミカ様が私などに“様”を付けさせるのかはわからない。

けれど、ミカ様のおっしゃることに背くわけにはいかない。

だから、せめてミカ様がいらっしゃらないときは呼び捨てに欲しいとお二方には何度もお願いしたのだけれど。

何故かグレンさんたちは私に様を付けたまま。

そればかりか、私にはグレン“様”ではなく呼び捨てにするようおっしゃった。

勿論そんな恐れ多いことを出来るはずもなく、“グレン様”とお呼びしようとしたのだけれど、そうすると返事してさえもらえなくなった。

どこかで似たような抗議の仕方をされた気がする。

主従はそういうところまで似るのだろうか。

そうして、両者の妥協点を相談し、結局は“さん”で落ち着くこととなったのだった。

「あの、グレンさんはミカ様と一緒に行かなくてよろしかったんですか？」
「ああ。俺は守り役だから」
ミカ様を守る。
それはまさにグレンさんのお仕事。
でも。
「でしたら余計にご一緒すべきでは？」
守るもののそばにいなければ守れないと思うのだが。
「いいんだ」
また、くしゃりと頭を撫でられる。
グレンさんは私の頭を撫でるのが好きなのかよくこうして頭を撫でてくれる。
でも、この髪は異形の色。
素手で触って気持ち悪くないのだろうか。
「気持ち悪く、ないんですか」
ぽつりと思わず尋ねてしまっていた。
その声は消えそうなぐらい小さなものだったはずなのに、グレンさんは聞き逃さなかったみたい。
グレンさんの紅色の綺麗な瞳が私の目の前に迫る。
床に膝をつき、私と視線を合わせてくださったのだ。

「ぐ、グレンさん」
慌てて立ち上がらせようと腕を掴むけれど、がっしりとした男性の体を私が思い通りにすることはできなかった。
「アリシア様」
さらりと髪が撫でられる。
そして、
「貴女は綺麗だ」
「！！」
体が固まった。
今、この人は何と？
「自信を持て」
ふわりと微笑むと、グレンさんはまた私の頭を撫でる。
「グ、グレンさん」
困惑する私にグレンさんはくすりと微笑んだ。
「綺麗で可愛らしい」
か、顔から火が出そう。
恥ずかしい。
グレンさんは優しいから。

だから、そう言ってくださるだけで、真に受けるなんてどうかしている。
真に受けてなんていない。
でも、こんなふうに正面からこんな言葉をかけられたことなんて一度もなくて。

（免疫がないの！）

心の中で言い訳するように叫ぶ。
そんな私を、グレンさんはとても優しい瞳で見つめていた。

選ぶということ

「アリシア。・・・今日が終わったら聞いて欲しい話がある」
「はい」

それは何だろう。
思い当たることがなくて首を傾げると、

「今はまだ言えない。だが貴女に選んで欲しいと思っている」
「えらぶ」

選ぶ。

その言葉がひどく頭に響いた。

選ぶ。
選ぶ。
選ぶ。
人は誰もが選びながら生きているのだと、レオンは私に語ったことがあった。
でも、

「アリシア？」

グレンさんが心配そうに声をかけてくれる。

「私などが何を“選ぶ”ことができるのでしょう？」

異形の私には選ぶ価値なんてない。
誰かの邪魔にならないように決められた通りに歩くだけだ。
この生が続く限り。

「アリシア様・・・」

グレンさんが悲しそうな顔をする。
ああ、どうして私はいつもこうなんだろう！

「すみません」

こんなにも優しい人まで傷つけるのだろうか。

「違う。アリシア様は悪くない。貴女はあまりにも傷つけられすぎただけなんだ」
「いいえ。私は幸せです。こんな身でありながらミカ様やグレンさんたちにお会いできました」

それに、村にはおばあさまが、レオンがいてくれた。

「だから、私が悪いんです」
「・・・きっと貴女は知ることができる。貴女の価値を」

価値？
おっしゃっている意味がわからない。

そのとき、

「！」

突然、グレンさんが立ち上がった。
そして、真剣な瞳で廊下の先をじっと見つめる。
そのあまりにも真剣な瞳に声をかけることさえできないでいると、
「アリシア様。悪いが少し出かけてくる。だが、今日は絶対に部屋の中でおとなしくしていてくれ」
「え？あの」
どうして？
声をかけようとしたけれど、彼は廊下の先を鋭い目で見据えたまま駆けだしてしまう。
「グレンさん？！」
名を呼んだときには廊下の先で、そして・・・あっという間に見えなくなってしまった。
残された私は呆然とグレンさんが去って行った先を見つめる。
明らかに尋常ではない様子だった。
何があったのだろう。
（まさかミカ様に何かあったの？！）
私の体を言い知れない不安が走った。

選ぶということ（後書き）

選ばれるだけ。
それがアリシアの今までなのです。
でも、きっといつかは

混乱、生じる

ミカ様の後を追うべきか。
それとも、言われた通り、部屋に戻るべきか。
困惑の中、迷っていると、

「あら。こーんなところに薄汚い女狐が」

グレンさんが去っていったのと反対側の廊下からメイドさんたちが掃除道具を持ってやって来た。
赤い唇がにやりと歪む。

「！」

とっさに部屋の中を振り返った。
浮かんだのは、部屋をのぞかれたときのミカ様の気分を害した表情。

ばたんっ

思わず扉を閉める。

「っ、なんなの？！その態度！！」

メイドさんたちが眉を吊り上げる。
確かに拒絶するように急に扉を閉めるなんて失礼な態度だ。

「すみません。でも、ミカ様は人に部屋を見られるのを好まれないのです」

頭を下げて非礼をわびる。
でも、
ばしゃんっ
「っ」
水が、全身を濡らした。
私は呆然としながら頭を上げた。
「やだ、その汚い目で見ないでよ」
「でも、せっかく洗ってあげたのに、全然汚れが落ちてないわねえ」
私の黒い髪を見てくすくすっと笑う。
「こんなのが下働きとはいえ王宮にあがっているなんて考えただけでぞっとするわ」
「はあ。いくら内部分立しちゃって人手が足りなくなったからって、地方から身売りされるように来た下働きなんて。ほんと、一緒の空気を吸いたくないわ」
「・・・」
「でも、こんな子を愛用なさるなんてエミカ様って変わっていらっしゃるわよねえ」
「ええ。まあこんな子。すぐに飽きて捨てられるに決まっているけど」
「そうね。あんなにお綺麗な方ですもの。きっと醜いものが珍しかっただけね」
くすくす。

くすくす。

笑う声がひどく頭に響く。

（こんなの当たり前だったでしょう）

何度も心の中でそう言い聞かせるのに、

ぽろり

瞳から涙がこぼれた。

その途端、メイドさんたちがきゃあっと悲鳴を零す。

「汚らしい。その目から零れた涙！神聖な廊下に落とさないでよ！」

メイドさんが箒を振りかぶる。

（叩かれる）

目を閉じた、そのとき。

どおおんんっ

『？！』

城が揺れ、大きな爆音が響き渡る。

『きゃあっ』

私たちは床に転がった。

ごごごっと遠くの方で何かが崩れていく音が不気味に響き渡る。

『・・・』

まだ、微かに続く揺れ。
それがようやく落ち着くと、メイドさんたちが立ち上がる。
その唇は怒りと恐怖に震えている。

「や、やっぱりその女の涙のせいだわ！」
「呪いの涙なのよ」
「黒い、異形。恐ろしい！」
「どこかに行ってよ！」

ばしっ
箒が投げつけられた。

「っ」

とっさに顔をかばったけれど、箒が両腕にあたる。
メイドさんたちはさらにバケツをなげつけようと振りかぶる。

「大変だああ！」

声が響き渡った。

「エルラードが攻めてきたあ！！」
「逃げろお！」

『？！』

私たちは声が聞こえた廊下の先を振り返った。
廊下の向こうにたくさんの人たちの足音が聞こえる。

「エルラードが？どうして」

思わずつぶやいた。
けれど、メイドさんたちは青ざめた表情でつぶやく。

「エルラードが怒ったのだわ」
「そういえば国境付近でダイヤモンド鉱山欲しさに何度も挑発的な行動に出てたらしいし」
「ああ、本当だわ。ついに怒ったのよ。早く逃げないと」
「どいてよ！」

メイドたちは口々にそう言うと私を突き飛ばし、我先にと駆けだして行った。

「エルラードが」

口にすればそれがどれほど恐ろしいことか分かる。

（でも、どうして聖なる国とも言われるエルラードが侵略なんて真似を？それに、イスターシュは貧しくて腐敗した国。いくら怒ったのだとしてももっと違う方法があったのでは？）

「っ、そんなことを考えている場合じゃないわ。ミカ様たちにお知らせしないと」

踵を返して走りかけ、

（待って！）

たたらをふむ。

（こんなときだからこそ落ち着かないと）

胸を押さえて深呼吸する。

（ミカ様にはアルティウス様がいらっしゃる。それに国王陛下とご一緒なさっているのよ。国王陛下の元にはたくさんの立派な騎士の方々もいらっしゃるのだから国で一番安全な場所のはずだわ）

だったらグレンさんは？

（ううん。グレンさんがこの騒ぎに気づかないはずがないし、怖い目で駆けて行かれたのもこのことを予期してかもしれない）

そうなると。

（ミーシェ！）

私はぱっと踵を返した。

ミーシェ！

王宮から少し離れたところにある下働きたちの仕事場までこの情報が回っているかわからない。

この国では下働きの人間は軽んじられる。

このことが知らされていないかもしれない。
（もし、ミーシェが何も知らなかったら）
恐ろしい想像に身が震える。
「ミーシェ」
早く。
早く知らせなければ！
私は震える足を叱咤して、ミーシェの元へと駆けだした。
赤い絨毯が敷き詰められた長い廊下を駆けぬける。
側室たち候補たちの部屋が続くそこを抜ければ、
各部署へと別れる王宮の玄関口にあたるロビーの二階に出た。
どんっ
「どけっ」
廊下から飛び出した私は走ってきた立派な服を着た貴族に突き飛ばされた。
「きゃあっ」
バランスを崩して一階へと続く階段から落ちそうになる。
「っ」
とっさに手を伸ばして手すりにしがみついた。

「はっ」
どくんどくんと鼓動が大きな音を立てる。
下を見れば、
「どいてよっ」
「どけっ」
人々が押し合いながら出口に殺到していた。
（みんなが逃げようとしているんだわ）
この王宮から。
この国から。
いつもは足音を立てずに優雅に歩くメイドも侍従も貴族も。
（ひどい）
国を守ろうとはだれも思わないの？
王様を守ろうとはだれも思わないの？
誰も、助け合おうとはしないの？
突き飛ばしあって、我先にと逃げて。
何人もの女性が、老人が突き飛ばされて踏まれて、怪我をしているのに。
「じゃまだっ」
邪魔者扱いしている。
悲しい。
悔しい。
どうして

どうして
どうして？
ぐっと手に力を入れる。
階段をかけおりた。

「邪魔だっ」
「っ」

突き飛ばされる。

（倒れてなんかいられないの！）

ふんばって、目的の場所に人ごみにもまれながら進む。

「こっちへ！」

皆に踏まれて、蹴られていた人の腕を掴んで無理やり引きずるようにして立たせる。

「っ？！」

貴族らしいおじいさんは私を見上げて呆然とした。
その顔は皆に踏まれたせいか血だらけだ。

「とにかく端へ行きましょう！」

おじいさんの返事を待たず、無理やり引っ張っていく。

「っ」

どんっ
どんっ
どんっ

「じじいがどけっ」
「ちょっと！どいてよ！！」

何人もがぶつかって、ぶつかりざまに唾を吐くように罵声を残していく。
でも、とにかく、端へ。

「んんっ」

端にたどり着く。
人ごみの中からおじいさんを引きずり出す。
私たちは廊下へと続く細い道に入った。
人ごみが集中しているところに対して、横にそれる道には信じられないくらい人がいない。

「おじいさん。この廊下をまっすぐ行って左手にある最初の扉を開けてください。その部屋から外に出られます。そうしたら、小さな勝手口が見えます。それを抜けてさらにまっすぐ行けば門があります。そこなら少しはすいていると思います」
「おまえは」
「一緒には行けないんです。ごめんなさい」

おじいさんの返事を待つ時間が惜しくて私はすぐに人ごみに飛び込んだ。

（たしか、こっちに）

「いた！」
女性は廊下の端まで自力でたどり着いていた。
でも、真っ青の顔のまま蹲っている。
「大丈夫ですか？！」
声をかけると貴族の女性はゆっくりと顔を上げた。
「踏まれて足をくじいたのっ」
女性が泣きながら叫ぶ。
（どうしよう）
連れて逃げてあげたいけれど、女性は私よりも背が高くて大きい。
とても一人では運んであげられない。
そのとき、
一人の騎士が私のそばを横切ろうとした。
ぽしっ
「？！」
気づいたときには私の右手は逃がさないと騎士を掴んでいた。
騎士の驚いた目が私と合う。
私はキッと騎士を睨んだ。
「怪我をした女性をほって逃げるなんて騎士の誇りはどこにいった

んですか！！」
「！」
「女性をかついで逃げてください！」
絶対に逃がさない。
瞬き一つせず、騎士をまっすぐに見つめる。
「・・・わかりました」
騎士はどこか呆けたような表情をしていたけれど、こくりと頷くと、騎士らしい綺麗な動作で膝をつき、女性に手を伸ばした。
「お連れします。背に乗ってください」
女性は安心したのだろう。
泣きじゃくりながら騎士の背に乗る。
「あなたは？」
「用がありますので。お願いします」
「あ、ちょっと！」
騎士さんの声を後ろに聞きながら私は壁伝いに使用人用の通路へと向かう。
一刻も早く、ミーシェたちに伝えたかったのだ。

混乱、生じる（後書き）

ようやく話が少し進みました。
早くラブラブが書きたい・・・
らぶらぶまであと二歩？
もうしばらく我慢してお付き合いください！

混乱、生じる（2）

「ミーシェ！！」

ばんっ

扉を思い切り開け放つ。

『？！』

調理場の人たちの視線が一斉にこちらを振り返った。
皆は驚いた表情をしているけれど焦った様子はない。
鍋からはおいしそうな良い匂いが漂い、洗物はぶくぶくと泡を立てている。
いつもの、変わらない日常。

（皆、知らないんだわ）

「エルラードが攻めてきたの！」

私は叫んだ。

「エルラードが？」

ざわっと皆が困惑する。

「そうです。王宮は今パニック状態です。皆も早く逃げてください」

でも。

ぷっ

「あははは」
「がははは」
「はあ？何言ってんだ？」
「とうとう頭の中まで変になったのか？」

げらげらと男の人たちが笑う。
女性たちも口元を引くつかせた。

「やだあ。そんなウソ。ついに見た目だけじゃなくて頭もおかしくなっちゃった？」
「違います！本当に」
「うそおっしゃい！」

アンナさんがずいっと前に出て仁王立ちで怒鳴った。

「私は王宮に勤めて３０年だよ！王宮には知り合いだって多いんだ。何かあればちゃんと私のところにくるんだよ」
「でも」
「でもじゃない！ほら、皆も。こんなしょうもない子供じみたことに付き合ってないで、とっとと仕事しな！」

アンナさんの一括で皆がぞろぞろと持ち場に戻ろうとする。
でも、ここで引き下がるわけにはいかない。

「笑っている場合じゃない！！！」

しん。

皆が瞠目し、こちらを見ている。

「王宮の中は今パニック状態で伝令を飛ばす余裕なんて全くありません。でも、あんなふうに一斉に逃げたら怪我人がたくさん出ます。皆で協力して順序良く逃げたほうがいいと思います」

息を大きく吸い込む。

「だから！男性陣は門を開けに行って出口を増やし、開け終わったらすぐに逃げる人を手伝ってあげてください！女性陣は町まで行ってこのことを皆に知らせてあげてください！」

言い終わると皆の呆然とした目が私を囲んでいた。
こんな私が言っても、皆は納得してくれないかもしれない。
でも、今はとにかくこうするしかないのだと気づいてほしい。

（お願い）

そう願ったとき。

「本当、なんだ」
「た、大変だ」
「そうだな。わかった」
「よし、男連中は俺に続け！」

言った通りに男性陣と女性陣とに分かれてばたばたと駆け出す。

（信じて、くれた・・・）

力が抜けそうになった。
けれど、

（待って・・・ミーシェ。ミーシェがいない）

「トミーさん。ミーシェは？ミーシェを知りませんか？」

そばを通りかかったトミーさんを捕まえる。

「いや。ちょっと前まではいたんだけど、メイドの仕事を手伝うとかで出て行ったきりだ」

「メイドの仕事」

メイドの仕事をしていたなら彼女は王宮の中にいたはずだ。

（だったら、あの爆発やエルラードが攻めてきたこともきっと耳にしているわね）

そして、ミーシェなら情報を聞けさえすればきっとうまく逃げてくれているだろう。

（そう、信じるしかない）

爆発に巻き込まれていたら？

さっきの女の人みたいに動けなくなっていない？

考えれば不安は尽きないけれど、でも、出来ることを一つずつしていかないと、パニックはあっという間に私にもやって来る。
だから、心の中の彼女に願う。

（ミーシェ。信じているからね）

ぎゅっと拳を強く握る。

そして、踵を返した。

「皆、上手に逃げてくださいね」
「あ、ちょっとあんたは」

アンナさんが私の手を掴んだ。
振り返るとアンナさんははっとして手を放そうとしたけれど、目が合ったからか手を放すのを躊躇う。
私はくすりと笑って、その手をそっと離させた。

「アンナさんも腰を痛めているんですから無理しないで、逃げてくださいね」
「あんた」
「それじゃあ」

私は再び駆けだした。
これで、思い残すことはない。
あとは、あの人の無事を確認できたら。

あの人の元へ。

私は足を動かした。

混乱の終わり。真実の始まり。

城からたくさんの人々が逃げていく。
貴族も侍従もメイドも。
けれど、貴族たちは酷かった。
彼らは邪魔する者を足蹴りにしたり、剣を使ったり、馬をつかったりと、我先にと逃げていく。

「まさに“膿”だね」

くすりと笑った青年の髪が太陽に祝福されるように輝いた。
彼の髪の色は――――――黄金色。

「王子殿下」
「来たね」
「すみません。アリシア様が」
「部屋にいなかったんだろう？」
「！」
「わかるよ。彼女の香りは」
「今どこに？迎えに行った方が」

「彼女は自分で来るよ。心配ない」
青年の空色の瞳はここにはいないはずの少女が見えているように甘く蕩ける。
控えていた青年の一人がくすりと笑った。
「では物語を始めましょうか。王子」

「そうだね」

青年は楽しげに笑うと静かにその場を後にした。

「はあはあ」

金で刺繍された見目麗しい服を身にまとった男は貴族だった。
逃げ惑う従者たちをなぎ倒し、彼は今我一番にと門の外へ向かっている。
彼の周りにいるのは彼同様、人々を薙ぎ払って真っ先に逃げ出した貴族たちばかりだ。
彼は周りを見て思う。

そうだ、私たちが一番に逃げなくてどうする。

私たちこそがこの国の要なのだ。

そして嗤う。

縋るような声が後ろから聞こえてくるが何とみすぼらしいのだろう。

やはり助かるべきは自分たち貴族。
選ばれし者たちだ。
自分たちさえ助かればいいのだ。

そして、彼らはようやく門の出口へとたどり着く。

光注ぐその場所へ。

視界が開ける。

そして、その瞬間。

彼らは知る。

門の外に並ぶ軍の存在に。

「ミカ様。ミカ様！」

来たことのない王宮の奥。
必死で駆ける。
人の姿はない。
こんな王宮の奥にこそ、身分の高い貴族がたくさんいるはずなのに。
そして、彼らは王を、王宮を、民を守るためにこの場で一致団結しているはずなのに。

（どうしてこんなにも人がいないの？）

この国が腐敗しているという話は聞いていた。
地方官僚は税を規定額よりも多く徴収し、私腹を肥やす。
中央はその地方官僚から巻き上げる。
そうして貧富の差が激しくなった町には仕事のないものが溢れている。
貧しさは犯罪を生む。
この国は乱れていた。
でも。
貴族は誇り高く、民を守るためにあるとレオンは言っていたのに。
信じていたのに。

（どうして？）

これでは、ミカ様の安否が心配だ。

（王様とご一緒だから安全だと思っていたのに）

何度も何度もこけそうになったがとにかく足を動かして探すしかない。

私は疲れを訴える足を叱咤して王宮の奥へ奥へと走り回る。

「ミカ様！ミカ様！ミカ様！」

どうか返事をして！

そう願ったとき。

わああっ

遠くで歓声のような声が響き渡った。

「なに？！」

恐る恐る声の方へと近づいていく。

近づけば近づくほど歓声が大きくなっていく。

これは何？

戦争が起きるから皆が怯えていたのではないの？

それとも、もうこの国は制圧されてしまったの？

（これはエルラード軍の歓声なの？）

不安ばかりが溢れてくる。

そして、一枚の大きな扉の前にたどり着く。
「この、先？」
割れるような歓声は明らかにこの扉一枚を隔てたところから聞こえてくる。
この扉を開けなければ、何もわからない。
取っ手を掴んだ。
手が震えたけれど、ぐっと力を込め――――開け放つ。

視界をいっぱいにする――――太陽の光。

（眩しい）

目を細めたとき。

「この“黒髪の御使い”の意志に従い、我ら聖国エルラードは新しき我が国民を手厚く扱うことを約束する！圧政に苦しみし民よ！解放の時がきたのだ！黒髪の乙女に感謝を！！」

腕を引かれる。

バルコニーへと引きずり出される。

目の前に広がるのは集まった群衆たち。

皆が歓喜の目で、声で、叫ぶ。

『黒髪の乙女に感謝を！！』

私は呆然としながら自分を抱える腕の持ち主へと視線を動かした。

金色の髪。
青い瞳。

「あなたは」
「約束を果たしに来たよ」

そう言って、彼は私の唇に自分のそれを押し付けた。

熱い吐息（前書き）

短くてすみません。
でも、区切りがいいのです（汗）

熱い吐息

「んんっ」

くぐもった声が唇と唇の間から零れる。
息が苦しくてその唇から逃れようと首を振る。

「はっ」

小さく息を吸えば、けれど、私の口をふさぐその人はその吐息さえ食べてしまおうとするように角度を変えてはまた私の唇をふさいだ。

苦しい。

でも、頭の奥が甘い痺れで満たされる。
眼下に広がるたくさんの人々。
その歓声。
全てが遠くなる。

「そう。僕だけでいっぱいになればいいよ」

くすっ

笑い声が熱い吐息となって私の脳をさらに痺れさせる。

これはなに？
ここはどこ？

全ての疑問が消えていく。
ただ、この人の瞳。
空色の熱い瞳だけが、私を支配した。

「やっと手に入れた。もう、離さない」

私は意識を手放した。

熱い吐息（後書き）

あと少しでもっとラブで黒くなれるはず！
頑張ります・・・！

「あ、こら！王子！」

後ろで抗議の声をあげる部下を放置し、力を失った彼女の体を抱き上げる。

やっと。
やっとこの手の中に手に入れた。
ココロが震えて、感動に手が震えそうになる。
けれど、貪欲に彼女を求める理性とは反対の感情が。
本能が叫ぶ。

足りない。

彼女が足りない。

もっともっと口づけて、もっともっと頬を寄せて、もっともっと近づきたい。
笑顔も。
体温も。
声も。
吐息さえも。
全てが欲しい。

「・・・ダメ、だね」

込み上げる想いを軽くするためにわざと軽く声に出した。
眠る彼女にそれをしても、彼女の心が応えてくれなければ意味がない。
今は君がこの腕の中にいるという幸せをしっかりと噛みしめていよう。

「王子！聞いてますか？！こ、こんな公共のど真ん中、というか、こんな群衆の中でシアになんてことを！！それに民衆にもっと何か言ってください！この後どうするんですか？！」
「全部君に任せるよ」
「はあっ？！」

絶句する部下はもう目に入らない。
いや、そもそも初めから入っているのは彼女だけだけれど。

「さようなら、目に入ったことのない君」
「はあっ？！何言ってっておい？！この変態バカ王子！！」
「ここはうるさいね。でも大丈夫だよ。今から二人だけの静かな場所に行くから。ゆっくり休もう」

僕は民衆にもう一度だけ笑顔を送り、そのまま踵を返した。
目の前には彼女が先ほど出て来たばかりの扉がある。
その前に立ち、片手で印をきる。
小さく呪文を唱えて魔力を注ぎ込めば、彼女が出て来たこの扉は、もう、異なる場所へと繋がる魔法の扉と姿を変える。
淡く光を放ちだしたその扉を見た部下は、血相を変えた。

「お、おい！ちょっと待て！マジか。マジでこの状況でトンズラするつもりなのかバカ王子！おまえ絶対シアが手に入ったから全部どうでもよくなったんだろう？！」

「さあ、アリシア。二人きりになろうね」
「こら！やめろ！働け！シアに変なことするんじゃねえ！てゆうかさせねぇ！」
「ふふ」
「？！か、体がうごかな・・・くっそ。この変態！シア！シア起きろ！マジで身の危険だ！目を覚ませーーー！！」
「じゃあね」

一応、後を任せる彼に礼儀としてあいさつし（決して無力なるものへの勝利の嫌味ではない）、僕は扉を開ける。
扉の向こうに見えるのは僕の部屋の寝室。

「シア～～～！」

鼻声になった絶叫を背に、

「じゃあね」

僕は扉をくぐった。

バタン

背後で扉が閉まる。

しんと冷えた空気。

先ほどまでの喧騒が微塵も届かない、静まり返った部屋。
腕の中の少女を見つめながら、僕は囁く。

「ようこそ、聖国エルラードへ」

額に口づけ、ベッドへ運ぶ。
そっと横たえると心地よさそうにふっくらとした唇が笑みを浮かべる。

「かわいい」

思わずにやけてしまう。

「ふふ。ああ、靴は邪魔かな」
彼女の足元に跪き、靴を脱がす。
まるで、彼女に忠誠を誓った騎士のように。
（いや、奴隷かな）
彼女だけの。
彼女のためだけに生きる。
「僕を愛して。アリシア」
心から願う。
そして、露わになった小さな足に唇を落とした。
「んんっ」
小さく声を漏らして、アリシアの足がぴくんっと微かに震えた。
起こしてしまったのだろうか。
そっと手を放し、彼女の様子を伺う。
彼女はもぞもぞと体を丸めると、また、穏やかな寝息をこぼした。
ほっと安堵して、僕も身軽になろうと豪奢な上着を脱ぐ。
ベッドサイドのチェストの上にそれを放置すると、ブーツも脱ぎさり広すぎるベッドに上った。
彼女の体をそっと動かし、彼女の頭を僕の膝の上に乗せる。
「ん」

人の熱が心地よいのか。
彼女は甘えるようにすり寄ってきた。
「本当に、かわいすぎるよ」
込み上げる愛おしさの行き場がなくて、何度も彼女の頬を撫で、額に口づける。
「・・・これから、君がびっくりするようなことがたくさん起こるよ」
秘め事を教えるように耳元でそっと囁く。
「そして、君の頭の中は僕でいっぱいになるんだ」
僕が君のことでいっぱいなように。
「だから、今はゆっくりお休み。アリシア」
僕の声に答えるように、彼女の唇が柔らかく微笑みを浮かべた。

眠る姫君の隣で（後書き）

たくさんのアクセスありがとうございます！
感想など頂けるとさらに励み&参考になります。
（皆さんがこの作品をどう思われているのか不安で・・・汗）
よろしければお願いいたします！
では、最大限の感謝をこめて。

真実（1）

「んん・・」

温かい。

でも、なんだか固い？

「ん？」

ゆっくりと瞳を開ける。

「起きた？」

くすり。

どこか聞き覚えのある、けれど、明らかに男の人のものだとわかる声に私は寝ぼけていた目を思い切り見開いた。

「あ、あなたは！」

「おっと。危ないよ」

彼の膝で膝枕をされていた私は飛び起きたせいで危うく頭突きをしてしまうところだった。

でも、彼がよけてくれたから大事はなかった。

ほっと胸を撫で下ろしたのもつかの間、

「おはよう」

さらりと頬を撫でられる。
びっくりして思わず後ずさ―――ろうとして、腕を引かれてそのまま腕の中におさまる。

ぽすっ

腕の中におさまった私に、

「どうして離れるの？」

不思議そうに尋ねられても困る。

「聞きたいのは私の方です。こ、これは一体どういうことですか？！あなたは」
「ああ。名前を名乗っていなかったよね。僕としたことがそのことに後で気づいたんだ。“失敗”をしたのは生まれて初めてで驚いたよ」

そう言って、彼―――三年前に再開を約束した青年はにこりと微笑んだ。

「僕の名前はミカエル。ミカエル＝シャル＝エルラード。エルラードの第二王子だよ。王位継承権は第一位だけど」
「ミカエル＝シャル＝エルラード・・・エルラードの王太子殿下・・・」

呆然と呟いた私に、殿下は首を横に振る。

「ミカ、だよ。君にだけは愛称で呼ばれたい」
ふふ、と幸せそうに笑って私の手を取る仕草はまさに王子様。
普通ならばうっとりと心奪われてしまいそうな仕草だけれど、私はそれどころじゃなかった。

（ま、まさか）

「ミカ？ということは、まさか、ミカ様？！」
「今頃気づいた？そうだよ。ミカ様、は僕だ」
「だって髪が。それに」

しゃべり方や態度は彼女そのままだけれど。
ミカ様は確かに声も全体的な大きさも女性だった。
今の彼は明らかに男性だとわかるくらいに背が高いし、声も低い。

「魔法だよ。魔法で女性になっていたんだ。でも、あまり長持ちする魔法じゃないから時々部分的に男に戻ったりする。だから、手袋やたくさんの布を使った服で体系を誤魔化していたんだよ」
「そん、な」
「ふふ。こんな高度な魔法が使えるのはごく一部の限られた人間だけなんだけどね」

殿下の言葉に私は呆然とした。
魔法。
実際にこの目でみたことはないけれど、聖国エルラードの王族やそれにつながる血脈には魔法を使うものが多いと聞く。
イスターシュにも魔術省があり国中から魔法を使える者が集められていた。

けれど、魔法使いはとても貴重な存在で一介の下働きが拝見できるようんな機会は一度もなかった。
ただ、噂ではきいていた。
魔法は無限の可能性を秘めているが、使える内容は個人によって大きく異なると。

炎を操ったり、水を操ったりできるものもいれば、
小さな物を浮かせるのが精いっぱいだったりもする。
たしかに女性に化けるというのは非常に限られた人間にしか無理だろう。

「そんなにすごい魔法を使ってなでイスターシュの王宮に入り込んだのはイスターシュを制圧するためですか？」

尋ねれば、

「それは違うよ」

ぴしゃりと彼にしては厳しい口調でそう言い切られた。

「だったらどうして」

どうして、あんなことが起こったの？
と言いかけて、一気に起こった出来事がフラッシュバックした。
爆発に、逃げ惑う人々。
アンナさんや皆。
そして、あの、バルコニーでのことも。

「っ！」

（そうだわ。どうしてこんなことを忘れていたのかしら！）

見たことがないほどの群衆の目の前で。
この人と。

かああっと頬が熱を持ち、どくんどくんと心臓が早鐘を打つ。
それなのに、動揺して目までうるんできた私に対して、

「赤くなった。ふふ、思い出してくれたんだね」

殿下は余裕綽々で。
むしろ、嬉しそうに微笑んでいる。
私はますます恥ずかしくなった。

「あ、ああ、あれは！」
「うん。みんなの前で口づけしたね。これでもう、僕が君のものだって国中が知っている」

満足そうに嬉しそうに微笑む殿下に私はくらりと気が遠のきそうになる。

「殿下、そのようなお戯れを」
「殿下じゃない。ミカ。ちゃんと呼ばないと」

また絶食による抗議をするのだろうか。

「皆の前で口づけ以上のことするよ？」

にこっと微笑まれる。

ぞくっと背筋に悪寒が走ったのは、気のせいと思いたい。

「本気じゃ」

「ふふ」

笑顔が怖い。

試してみるなんて、やめたほうがいいような気がする。

「・・・ミカ様」

「様？よし、じゃあ、バルコニーに」

「ミ、ミカ！」

「残念。僕が君を愛しているって世界中に広めたかったのに。でも、嬉しいよ」

「・・・」

「さて、そろそろお腹が減ってない？」

「それよりもお聞きしたいことがあります」

「うん。僕も君にたくさん話したいことやしたいことがある。だから、先にご飯を食べて体力を整えてから」

「はいはーい！爆破するわよ。この変態王子！」

突如、高い、女性の声が聞こえた。

と思ったら、

どーん！！

「？！」

爆音と振動が扉の向こうから聞こえた。
そして、
ぎいい
寝室の扉が音を立ててゆっくりと崩れ落ち、
どおおんっ
床に倒れ落ちた。
崩れ落ちた扉の向こうに見えたのは。

真実（1）（後書き）

感想をくださった方々。
本っ当にありがとうございました！
今日は、正直、とても疲れていたのでアップしない予定だったのですが。
嬉しくて頑張れましたｖｖ
お越しくださっている皆さんも本当にありがとうございます！
これからもよろしくお願いいたします。
それでは、最大限の感謝をこめて。

真実（2）

（と、扉が・・・）

呆然とする。

そんな私に対し、

「アリシア。怪我はない？朝から爆破なんて野蛮な真似よくできるよね」

ミカ様はにこりと平常心のまま。

「ちょっと！あたしがそんなヘマするわけないでしょ！それよりどさくさにまぎれてアリシアに触ってんじゃないわよ。この変態！」

「！」

はっとした。

だって、この声は。

「僕が触っているんじゃない。アリシアが僕に触れてくれているんだ」

「あー、マジ、この三年地味なことばっか頑張ってたからかしら。頭のねじがゆーるい緩い。むしろ全消失？」

「こらこら、ミーシェ。いくら本当のことでも言いすぎですよ」

（やっぱり、ミーシェ！）

そう。
扉から現れたのは同僚のミーシェだった。
「ミ」
嬉しくて駆け寄ろうとしたとき、
「おまえもな」
ミーシェに続いて、アルティウスさんとグレンさんが現れた。
「二人の寝室に断りもなく入るなんて部下の礼儀がなってなくてごめんね」
「公衆の面前で口づけした挙句、あとのことは将軍殿に任せて放り投げ、自分だけアリシア様と、とっとと寝室に直行したあなたに礼儀もなにもあったものではないと思いますが？」
「アルティウス。甘いわよ。こいつの悪行はそれだけじゃないわよ。きっとアリシアが気を失っているのをいいことに膝枕しながら一睡もせずにストーカーのように見つめながら幸せに一晩過ごすという変態・妄執的行動をとっていたに違いないわ！」
「・・・血族はすごいな。そんなことまでわかるのか」
「ちょっと、グレン。死にたくなるようなこと言わないでよ」
「そうですよ。グレン。それはあまりにも失礼です。あなただってこの王子の変態的行動ぐらい予想がつくでしょう？」
「まあ、な」
皆さんの何だかとても失礼なような気がする会話がポンポンと飛び交う中。
「あ、あの」

「ん？どうしたの？アリシア」

皆さんのお話の中心はミカ様だと思うのですが。
何故かミカ様は皆さんが話している最中も私から微塵も視線を動かしておられないような。
居心地が悪くてお声をかけてみたのだけれど、
返ってきた笑顔は天使のように綺麗で。
何も言えなくなる。
それに、とても、ミーシェたちが話題にしているような人には見えない。

（ああ。そうよ。きっとこれは冗談なのね！）

仲がよさそうでいいなあ。

そう思ったとき、それまでアルティウスさんたちと話していたミーシェがばっとこちらを向いて、じとーっと私を見つめた。

「ちょっとアリシア。私たちの話、本気にしてないでしょ」
「う、うん」

ミーシェの迫力に押され気味に答えると、ミーシェは同情いっぱいの眼差しで私を見つめる。

「まあ。すぐに思い知ることになると思うわ。がんばって」
「？」

（どういう意味だろう）

そう思った。

でも、それよりも。
こうして私なんかにまるで友達のように話しかけてくれるミーシェに、私の心はふつふつと安堵と喜びに満ちてくる。

（大切な人）

無事でよかった。

ほっとすれば、気が抜けてしまったみたいに感情が溢れてきて。
止まらなくなる。

（本当に、無事でよかった・・・）

私は感情のまま、ベッドから飛び降りてミーシェに駆け寄った。

「ミーシェ」

抱きつく。

『アリシア？！』

ミーシェとミカ様の声が重なる。
ミーシェは気持ち悪くないかなと心配に思うよりも、とにかく、今は彼女の無事に安堵する気持ちでいっぱいだった。

「無事でよかった」
「アリシア・・・」
「ミーシェのこと信じてたけど、爆発に巻き込まれていたらって心配だったの」
「・・・うん」

ミーシェが一瞬戸惑うように頭に触れ、けれど、そのまま宥めるようによしよしと私の髪を撫でてくれる。
私は余計に泣けてきてしまってミーシェの肩に顔を押し付けた。

（本当に無事でよかった）

元気に、こうして、何もなかったみたいに話が出来て。
それがとても嬉しい。
でも、

「アリシア」

そっと肩を押されて、視線を合わせさせられる。
ミーシェの顔は真剣だった。

「どうしたの？」

気持ち悪かったのだろうか。
一瞬、体中の血が冷たくなる。
ミーシェは言い辛そうに眉を歪めると

「そのことなんだけど、貴女にはいろいろ謝らないといけないことがあるの」
「ミーシェが、私に？」

こくんと頷く。

「どうしたの？」

尋ねながら、そういえば、と色々な疑問に気づく。
ミーシェたちのあまりに自然なやり取りや、彼女との再会への興奮
につい忘れてしまっていたけれど。

（考えてみればどうしてミーシェがここに？）

先ほどの気さくなやり取りで、ミカ様をはじめ、アルティウスさん
やグレンさんたちともミーシェが顔見知りだったことがわかった。
でも、ミーシェは下働きだったはずだ。
身分の差が全く見えない今のやり取りは明らかにおかしい。

（ミーシェは本当は一体何者なの？）

私が心の中でそんな疑問を浮かべたとき、

「アリシア様。ミーシェのことや私たちのことも含めて全てをお話
しします。でも、まずは朝食をとりましょう。昨日は色々なことが
ありましたし、貴女もお腹が減っていらっしゃるでしょう？」
「でも」

朝食どころじゃ。
そう言いかけた私に、アルティウスさんは安心させるように微笑む。

「大丈夫。焦らずとも全てお話しますよ。アリシア様」

優しい笑顔は私の心の中にあった焦りを抑えてくれるには十分だっ
た。

「わかりました」

こくりと頷く。
すると、よく出来ましたというようににっこりと綺麗な笑みが返る。
その美しさに私の頬は思わず赤くなった。
そのとき、ぐいっと腰を引かれた。

「きゃっ」
「アリシア、他人と見つめあわないで」

ぎゅっと後ろから抱きしめられた。

「ミカ様？」

驚いて思わず出た呼び方に、ぴくっとミカ様のこめかみが微かに動き。
笑みを深くしたミカ様は

「バルコニ」
「ミ、ミ！」

笑顔が怖い！

「はあ。これじゃあ埒があかないわ。とにかく、食堂に行くわよ」

ミーシェの言葉に私はこくこくと頷いた。

真実（3）（前書き）

ご無沙汰してしまいました。
すみません。
少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

真実（3）

「アリシア、気づいた？」
「え？」
「やっぱり気づかないか。実はここ、イスターシュじゃないの」
「！」
「昨日のうちに王子が勝手に魔法でエルラードに帰ってきちゃったの」
ミカ様（心の中では様を付けさせて頂こう）を見上げると彼はずっと私を見ていたみたいで、すぐに目があった。
「本当ですか」
「あそこは煩くて君が起きてしまうといけなかったから。大丈夫。向こうのことは信頼できる働き者に任せてあるし、僕もたまには行くから」
イスターシュとエルラードは馬車で行けば一月以上もかかる。
それなのに、一晩で？
魔法とはそんなにも何でも出来るものなのだろうか。
「アリシア様。この人が特別なだけですから。普通はできません。まあ、私クラスになるとそのくらいできますけど」

「ちょっと全然さりげなくない自慢は止めなさいよ」
「自慢に聞こえましたか？」
「あー、あたしの周りってどうしてこうウザい奴ばっかりなのかしら」
「ミーシェ」
「ああ、アリシアは違うわよ。貴女は私の唯一のオアシスよ！」
笑顔が返されてほっとする。
「着いた」
それほど大きくはない、でも、金の装飾がふんだんになされた上品で綺麗な扉の前にたどり着いた。
グレンさんが扉を開いてくれる。
「すごい」
私は思わず感嘆の声を漏らしてしまう。
白を基調としたその部屋は繊細なシャンデリアが部屋の中心を飾り、壁や柱には鳥や鳥かごなどが繊細に彫刻されて一枚の絵のようになっている。
部屋に窓はないが天井からは朝日が差し込み、部屋の中を明るく照らしている。
そして、部屋の中央には１０人は座れる長いテーブル。
染み一つないテーブルクロスに覆われたそれは、部屋にとてもあっ

ていた。

「さあ、こちらへどうぞ」

「アリシアはこっちだよ」

案内してくれようとしたアルティウスさんの手を叩き落とすと、ミカ様は私の手を取って私を席へと座らせた。

ばしっとすごい音がしたのでアルティウスさんが心配でちらりと後ろを振り返ったのだけれど、ミカ様が後ろに立っていらっしゃって見えない。

「振り返って見つめるくらい、僕が好き？」

甘く蕩けるような目でそう言われているような気がするのは、きっとものすごい自惚れだとはわかっている。

でも、そのくらい甘い笑顔でそう言われては、後ろのアルティウス様にお声をかけにくい。

（アルティウス様、すみません）

心の中で謝る。

「はい、アリシア。こちらへどうぞ」

ミカ様がとても自然な動きで椅子を引いてくださる。

私は恐れ多くて戸惑ってしまったけれど、それ以上に、

「ひいっ！」

ミーシェがおばけでも見たみたいに顔を蒼白にさせて引きつった叫

び声をあげた。
それに、
「王子が椅子を引いている。信じられん」
「明日は鉛でも降ってくるかもしれませんね」
グレンさんやアルティウスさんの意見に私もようやく正気に戻る。
（そうよね！）
王子様にお椅子を引いていただくなんてありえないわ！
「すみません！私がお引きします」
そう言って代わろうと手を伸ばしたら、
「アリシアは僕のお姫様だから」
にっこりと、そして、有無を言わせない迫力を持ちながら腰を抱かれてそのままエスコートされてしまう。
絶妙な椅子の動かし方でルカ様は椅子を戻し、私はぽすんと椅子に着地した。
そんな私を満足そうに見つめるとルカ様はご自身で椅子を引かれ、隣の席に座られる。
「せめてアリシアを二番目の席にしなさいよ。そうしたらもう一人、隣に座れるのに」
ミーシェが私の向かいの席に座りながらそう言い、

「どこまで心が狭いんでしょうかねぇ」
その隣にアルティウスさんが座る。
「二番目の席、ですか？」
「アリシア様の席は一番偉い人間が座る場所だ」
さらにその隣に座ったグレンさんの言葉に、
「申し訳ありません！」
私は慌てて立ち上がろうとした。
でも、椅子を引こうと押してもぴくりとも動かない。
「アリシア」
いつの間に立ち上がったのか。
ミカ様が私の後ろに立っていらっしゃった。
どうやら、椅子が動かなかったのはミカ様が押さえていらっしゃったからのようだ。
私が椅子を引くのを諦めて椅子から手を放すと、椅子を押さえていたミカ様の手が私の肩へと移動する。
「ダメだよ。他の席になんか行ったら。誰かが君の隣に座るかもしれない」
（？）
座ってはいけないのだろうか。

「アリシア。この人決めたことは譲らないから座っときなさい。あと、位なんてしょうもないことは考えなくていいからね！」
「でも」
「いいから」

ミーシェがそう言うのならそうした方がいいのだろう。

「わかりました。みなさん、すみません」
「いや、俺の言い方が悪かった。地位という意味で席の話をしたんじゃないんだ」
「そうですよ、アリシア様。皆、貴女の隣に座りたいだけなのです」
「？」

どうして私の隣などに座りたいのだろう？

「ああ。お腹減った。それじゃあ、料理を運び始めてもらうわね。話は食事の後よ」

ミーシェの言葉に、控えていたメイドの方たちが料理を運び始める。私はメイドの方に給仕されるような身分ではないのに。

「アリシア。あんたはもうすごいことになっちゃっているからこんなことでビクビクしてたら身がもたないわよ」

同じ下働きだったはずなのに、ミーシェは給仕されることになれているようにそう言った。
ミカ様たちへの気心の知れた態度。
それに、勝手知ったる、という慣れた感じ。

（ミーシェは本当は一体どんな立場の人なんだろう）

知っていたはずの同僚がひどく遠い存在に思えて、私は小さく震えた。

食事の後には何が待っているのだろう？

間章：朝食をあなたと

朝食だから軽めの内容になっているはずなのに並べられた食事はとても豪華だ。
目の前のメインのお皿には熱々のスクランブルエッグ。
湯気をのぼらせるパンは五種類。
ジャムやバターなどが十種類近くあり、
果物は鮮やかに盛り付けられていて、飲み物はグラスに三種類も出されている。
どれから手をつけたらいいのか、それに、貴族の方々のマナーも分からなくて、私は戸惑うしかない。

「アリシア。ほら、あーん」
「えっ」

横を見れば、ミカ様が一口大の、ジャムがたっぷりのせられたパンを私の口元に運ぼうとしていた。

「あ、あの」
「ほら。あーんして？」

これが正しいマナーなのだろうか。
にっこりとほほ笑まれれば何だか逆らえなくて。
私は戸惑いながらも口をそっと開ける。

「ふふ」

嬉しそうにミカ様が微笑み、口の中にパンが入れられた。

（わあ）

体の中が感動でいっぱいになる。

（こんなにおいしいもの、食べたことないわ）

パンは混じりけのない小麦の味がして、しっとりと甘く、添えられたたっぷりのジャムは素材の甘さを生かしながらも砂糖がしっかり使われているのがわかる、上品でしっかりした甘さ。

「おいしい？」

こくこくと頷く。

ミカ様は笑みを深くした。

「じゃあ、もっとたくさん食べさせてあげるね」

そう言ってまたパンに手を伸ばそうとなさるので、私は慌ててその手を止めた。

「ミカ。ミカにそのようにして頂いてばかりにはいきません」

そう言って、少し戸惑ったけれど、パンに手を伸ばし、小さくちぎってバターを塗る。

そして、

「あ、あーん？」

「！！」

恥ずかしい。
でも、ミカ様にして頂いたのにして返さないわけには。
私は顔を真っ赤にさせながら、ミカ様にパンを食べさせようと手を伸ばす。
けれど、ミカ様は何故か固まっていた。

「ミカ？」
「え。い、いや。その」

真っ赤になってしどろもどろするミカ様。

（やっぱり、私からしてはいけないような失礼なことだったんだわ！！）

私は慌てて手を引っ込めた。

「申し訳ありませんっ」

お皿に慌ててパンを置こうとする。

「ま、待って！」

その手をミカ様に掴まれた。

「その・・・た、食べさせてくれるの？」
「？はい。ミカが許してくださるのなら」

私の返事にぱっとミカ様は嬉しそうに微笑む。

そして、

「お願いします」

「はい」

ミカ様が喜んでくださっていることが嬉しくて、私は少し緊張しながらパンを手に取り、そっとミカ様の口元へ運ぶ。

ぱくり。

ミカ様がパンを口に入れたとき、ちろりと熱い舌が指にあたる。

（どうしよう。なんだか、すごく恥ずかしい）

頬に血が集まるのがわかる。

戸惑っていると、

「すごい」

ミカ様の呆然とした声が聞こえた。

「？」

顔を上げると、ミカ様が不思議そうな顔でパンを見つめていらっしゃった。

「すごいね。アリシア」

こちらを向き、二コリと褒められる。

けれど、私は何を褒められているのかわからなくて首を傾げた。

「物を食べておいしいと思ったのは初めてだ」

（え？！）

じょ、冗談だよね。
私はびっくりしてミカ様を見つめる。
けれど。

「冗談じゃないよ」
「でもミカなら美味しいものをたくさん召し上がってきたはずでは」
素朴な疑問を口に乗せれば、

「僕には心がなかったんだよ」
「？」
「アリシア。もう一口、食べさせてくれる？」
「はい」

私はもう一口ぶん、パンを千切って、次はジャムを塗った。
先ほどミカ様が私のパンに塗ってくださったものだ。

「あーん」

私の言葉にミカ様は素直に従って口を開け、そして、ぱくりと召し上がる。

「ふふ。やっぱり美味しい」

（本当に幸せそう）

「アリシア。もう一口」
「って、いつまでやらせるのよ！あんたは！」
「アリシア様。テーブルマナーに食べさせあうというのはありません。全てはこの王子の姑息な策略です」
「！！」

アルティウスさんの言葉に衝撃を受ける。

（そ、そんな。だったらなんて恥ずかしいことを）

「アリシア様。アルティウスの言った通りだ。全ては王子の勝手な我儘だ。無垢なあなたを騙した小ずるい策略。あなたが気にすることではない」
「グレンさん」
「ちょっと許すとどこまでも図々しく入り込んでくるのがこの王子よ！アリシア。気をつけなさい」
「は、はい」

ミーシェの気迫に押されて思わず頷く。

「正しいテーブルマナーはこうよ」

そう言って、ミーシェは一つ一つ説明しながらお手本を見せてくれる。

「って、感じ。どう？わかった？」
「うん。やってみるね」

見よう見まねでやってみる。

「うん。そうそう。順番やだいたいの所作さえできてれば後は適当でいいからね」
「うん・・・でも、変なところないかな？」
「大丈夫。とてもお上手ですよ。アリシア様」
「アリシア。これが気に入ったの？」

ミカ様がフォークにさしているのはパイナップル、と呼ばれる南国から取り寄せられた果物。
酸味があるけれど甘くておいしいそれが、実は私はとても気に入っていた。

（でも、どうしてわかったのかしら）

「アリシア。食べさせてあげる。ほら、あーんして」
「って、あんたはまたそれかい！」
「ああ。緊張しているんだね。だったら、口移しでもいいよ？」
「え？え、ええっと」

（ミカ様はとても親切な方なのね）

でも、口移し何て恥ずかしすぎる。
それに私は口移しででなくてもちゃんと食事ができる。

（でも、断るのも失礼な気がするし）

困惑していると。

「あんたというやつは・・・」

ガタガタガタ。

テーブルが揺れ始める。
ミーシェの方に視線を移せば、ぶるぶると震えながら、ミーシェはテーブルクロスを掴んでいる。

「どこまで変態なんじゃーい！！！」

ミーシェの投げた大きなお皿が宙を舞った・・・。

真実（4）

お皿が宙を舞ったりと騒がしくも楽しい朝食が終わり。
ミカ様は給仕の方々を下がらせる。

「それじゃあ、話を始めましょうか」

どうやらアルティウスさんが話をしてくださるようだ。

「お願いいたします」

私はきゅっと唇を噛み、覚悟を決めてぺこりと頭を下げた。

「はい。ですがあまり気負わないでくださいね。
まずはこの国のおバカな王子の話から始めますから」

「？おバカな王子様、ですか？」

「ええ。この国エルラードには三人の変態王子がいます。
長男は化学バカで日々研究に明け暮れる毎日。
政治になど微塵も興味がありません。
次に次男を飛ばして三男。
彼は外国語バカであらゆる言語を操ります。
辺境の島国タオス島の少数派民族ナハ族の言葉を理解し、
おそらく認知されている限りの全ての言語をマスターした彼はついに動物の言語習得のために旅立ち、
今は行方知れずです。

まあ、おそらくはどこかで動物たちと会話しているだろうと誰も心配していませんが。
そして、おまちかねの次男。
それがミカエル様です」

ミカ様から第二王子であることは聞いていた。

でも女性のミカ様が三年前のあの約束の人で、約束の人が王子様でと、色々なミカ様がいてさっきは驚く暇がなかったけれど。

アルティウスさんから改めて聞かされると偉い方なのだと痛感する。

（私なんかが同席することなんて許されるはずない方なのに）

思わず床を見つめる。

（本当ならこの床に平伏しなければいけないぐらいなのに）

「アリシア、だめだよ」
「え」
「アリシアが床に座るなら、僕が地に座って君を膝に乗せるよ。冷たい床は君には似合わない。それで二度と城には戻らないかな」
「？？」

まるで心の中を読んだような言葉と、その内容に驚けば、

「つまり、アリシア様に壁を作られるくらいなら王子という立場を捨てる、ということか。
さすが変態王子だな」

感慨深げにグレン様がこくこくと頷く。
一瞬驚いてしまったけれど。

（ああ。ミカ様はお優しい方だから）

グレン様は何故か冷ややかな目でとても厳しいことをおっしゃったけれど、
でも、嘘でもこうして慰めの言葉をくださるミカ様は本当に素敵な方だと思う。

（ありがとうございます。優しい嘘は嬉しい）

心の中で感謝する。
けれど、

「僕がアリシアに言うことは全て真実だよ」
「え」

にっこりとほほ笑まれる。

「アリシア様。続きを放しますね」
「あ、は、はい。お話の腰を折ってすみません。お願いします」
「いえいえ。さて、この変態王子ことミカエル王子。
彼は全ての分野において特出し、人知を超えた魔力を兼ね備え、政治力にも半端なく優れ。
そして、非常に残念なことに全てに興味がないバカでした」
「興味がない？」
「はい」

私は思わずミカ様を見つめた。

目が合う。
ミカ様はふわり、と微笑んでくださった。
私はその綺麗な笑顔を見つめながら、ミカ様の心の内を思う。

（興味がない、というのはどんな感情なのだろう）

なんだか、空虚で寂しいことのように思える。
それもミカ様のように容姿や才能に恵まれた方であったなら、なおさら。
でも、私の方を向いて優しく微笑んでくださるミカ様は空虚な感じなんて微塵もしない。
青い瞳は春の日差しのように柔らかく、
そして、その輝きは太陽を思わせるほどにキラキラしている。
空虚なようにはまるで見えない。
世界の全てを愛していそうな。
むしろ。

（むしろ、とても幸せそうに見えるのだけれど）

「ふふ。アリシア様。この話には続きがあるのです」
「すみません。続きをお願いいたします」
「はい。さて、そんなミカエル様はもてあますほどの魔力でよく城を抜け出していらっしゃいました」
「地方徘徊までしだした、ますます困った王子というわけよ」
「けれど、ある日、今から三年ほど前。彼は他国の辺境の村里離れた泉で一人の少女に出会いました。
そして、ついに非常に遅ればせながら、王家の者が皆持つ“〇〇バカ”の称号を手に入れたのです」
「それは？」

『アリシアバカ』

アルティウスさん、グレンさん、ミーシェの三人の声がはもる。

「・・・？」

なんだか私の名前とよく似た響きが入っているような。
三人の指が私を指しているような。

「アリシア様至上主義」
「アリシア様だけが大切」
「アリシアの全てを知りたい。そういう、バカよ」
「・・・」
えっと・・・？
頭が話にうまくついていけない。

困惑の中。
私がぎこちない動きで首を横にしてミカ様を見つめれば。
ミカ様の優しい瞳が静かに私を受け入れていた。

真実（5）（前書き）

たくさんのお気に入り登録、また、アクセスを頂き、本当にありがとうございます！！
一月ほどアップできない状態が続いていたのに、
見捨てずに、こうして来てくださる方がたくさんいてくださって、
とてもとても励みになります。
皆さんのおかげで作品をアップすることができました。
本当にありがとうございます。
これからもよろしくお願いいたします。

真実（5）

「困惑なさるのも勿論だと思います。ですが、これはどうしようもない事実ですので」

ハンカチさえ用意して目元を拭いながら、アルティウスさんは同情いっぱいの瞳で私を見つめた。

「でも、このアリシアバカ。アリシアのためだったら、意外といいこともするのよ」

ミーシェの言葉にグレンさんが深く頷く。

「今から三年前だ。
アリシア様と出会った王子は、国に帰ってくるなり、王や他の王子たちに宣言した。
今から隣国を傘下にいれることにした、自分を王位第一継承者にしろ、と」

「？！」

びっくりする私の横で、ミーシェがカラカラと笑う。

「あの時はびっくりしたわよね～。あたしはこの王子の従姉妹で爆破バカなんだけど、そのときは自分が吹っ飛ばされた気分だったわ」

「ば、爆破？従姉妹？！」

「そうなの。さっきアリシアが心配したって言ってくれた爆発。私が陽動のために仕掛けたものだったのよ」

「！」

驚きすぎて声が出ない私に、ミーシェはしゅんと肩を下ろす。そして、まるで小動物のような上目づかいで、私の様子を伺うように見つめた。

「心配かけたのにごめんね。でも、誓って、誰にも怪我がないようにしたから！だからアリシア。お願い、私を嫌いにならないで！」

必死に言い募るミーシェに、私はとても驚いたけれど、こくりと頷く。

（ミーシェが好きで人を傷つけるようなことをするはずがないわ）

「理由があったんでしょう？嫌ったりするわけないわ」

（私が嫌われることがあっても、私がミーシェを嫌うなんてありえないわ）

微笑んでそう言えば、

「アリシア・・・ありがとう」

ミーシェが安堵の息を零す。

その表情に私もほっとする。

「話を戻してくれるかな」

どこか苛立ったようなミカ様の声が話を切るように入った。

アルティウスさんはくすりと笑うと、

「わかりました。それでですね。
とにかく王子はアリシアバカになられたので、貴女を手に入れるために色々と考えられたのです」

『アリシアを急に連れてきて正妃にしても、余計なことを言う人間は後を絶たないだろうね』

『そのためには、黒い髪と目にくだされる異形という評価を変えるしかない』

『むしろ、それを神聖なものにすればいい。異形と神聖は紙一重。少し手を加えるだけですぐにひっくり返る』

『そのためには劇的なシナリオが必要だ』

『しかも、アリシアが後で知って気にやまないような、人道にのっとったストーリーが』

「そして、彼は一つのシナリオを書きあげます。
それが今回の腐敗した大国イスターシュの解放とそれを導いた黒髪の御使いというストーリーです。
イスターシュは貴族が権力をふるい、もはや泥船でのパーティー状態。
放っておいても国内から内乱が起きたでしょうが、それでは戦争によって多くの命が奪われる。
アリシア様の村も辺境とはいえイスターシュの領内です。
万が一にでも火の粉をかぶることがあればいけないですから、一石二鳥でした」

「だが、穏便かつクリーンな計画を行うためには兵や協力者がいる。
今まで、政治のことは王に任せきりだった王子には、側近や協力者がほとんどいなかった」

「力やあくどい感じでやるなら、この変態王子ならお茶の子さいさいだったでしょうけど」

「そうでしょうね。
けれど、心にあるアリシア様の笑顔を前にすれば。王子も形無しです。
そして、側近を増やすことから始めた王子はまず私を起こしにやってきました」

「起こす？」

私の疑問にアルティウスさんは底の見えない笑みを浮かべる。

「まあ、それはいいとして。
とにかく辺境の地にいた私に仲間になってくれるよう負かしに、いえ、挑みに、間違えました。
頼みにやってきました」

「負かす？」

「いいえ。言葉のあやです。忘れてください。
とにかく、彼の強い意思に心ひかれた私は面白そうだったので協力することにしました。
決して、殺すと脅されたからではありませんよ」

「はあ」

「次に俺やミーシェ。他にも何人かを招集した」

「私みたいに王族に連なる者やグレンみたいに公爵家っていう位が高い者だけじゃなく、
王子が目を付けた者だけを、ね。
まあ、皆超個性的だったんで最初は微塵も言うことなんて聞くつもりなかったんだけど」

「負かしてやったら言うことを聞くようになったんだよね」

くすりと笑うミカ様。

こ、怖いです。

「違うわよ！
なんか、今までのあんたとは全然違ったし、

言うこと聞いてやってもいいかなって思うようになったのよ。
あと、一応、隣国の悲惨さは聞いてたから、良いことなら協力した方がいいかなとも思ったし」

「ふふ、爆弾娘が何を言う」

「おいコラ」

「とにかく、こうして仲間を増やした王子は、
貴女を迎え入れたときに、貴女を守る盾が出来るよう基盤を作りました。
これに一年ほどかかりましたが。
ああ、忘れていました。もちろん、一年間貴女を放っておくはずがありません。
貴女の様子を逐一報告し、また、彼女を守る者として王国の騎士団将軍を貴女の村に派遣しました。
覚えていらっしゃいますか？レオンという」

「レオン？！もちろんです！忘れるはずありません！」

「よかった。
彼は貴女をとても大切に思っていたので忘れられていては可哀そうですから」

「でも、レオンがそんなに偉い方だっただなんて」

屈託のない明るい笑顔を思い出す。

おばあさまがいなくなって、人との会話なんてほとんどなくなって。

淋しくて苦しかった日常に自然と入り込んでくれたレオンは私の宝物のような人だ。

（でも、レオンはとても偉い人で）

そして、命令であの村に来ていただけだったんだ。

鉛を飲んだみたいに胸が苦しくなる。

（ごめんなさい）

心の中でレオンに謝る。

ミカ様がどうして私なんかに意味を見出してくださったのか、整理のつかない頭は未だに受け止められていない。

でも、レオンの自由を奪ってしまったのだということはわかる。

本当なら目通りさえできないような方だったのに、あんな辺境の土地で。

（今度会えたら謝りたい）

ぎゅっと両手を胸の前で強く結ぶ。

「アリシア」

ルカ様にそっと唇を押さえられる。

「呼び捨てはダメだよ」

「え？」

思いがけない言葉に現実に引き戻される。
きょとんとミカ様を見つめれば、

「呼び捨てはダメだよ」

もう一度言われる。
私は慌ててコクコクと頷いた。

「はい。そんな偉い方を呼び捨てにするなんていけませんね。
教えてくださってありがとうございます、ミカ様」

「レオンは呼び捨てで僕は様付？」

また間違えてしまった。私は慌てて言い直す。

「ミカ、です」
「うん」

ミカ様がとても満足そうに頷かれたから、一瞬浮かんだ、
将軍よりも地位の高い王子様を呼び捨てにする方がおかしいのでは、
という疑問は自然と消えてしまった。

そんな私たちの向こう側で

「ああ、かわいそ。今頃あっちの王宮で事後処理に追われているだ
ろうに。
見知らぬうちに三年間の友情は消し去られ返礼は他人行儀な呼び方。

さすがの将軍も泣くんじゃないかしら」

「まあ、彼だけ三年も彼女と一緒にいたんです。このくらいはされて当然ですよ」

「ああ、そのとおりだ」

「・・・グレン。あんたも実はえげつない奴だったのね」

「敵に塩は送らない。常識だ」

「あー、なるほど。はいはい」

よく聞こえないくらい小さな声で何か話し合い、
そして、最後にミーシェが呆れたようにため息をついていた。

真実（5）（後書き）

少し長くなるのでここで切りました。
レオンはヤラレキャラなので、早く出したいです。

真実（6）（前書き）

皆様のお力のおかげで、小説を読もうの恋愛部門で、一瞬でしょうが、ランキング一位をとらせて頂けました。
皆様、いつも本当に、ありがとうございます。
これからも、これを励みに頑張らせて頂きます。

真実（6）

「あの、みなさん？」

何かをコソコソとしゃべっていらっしゃったので、遠慮しながら声をかけたのだけれど、

「アリシアは気にしなくていいから。
んで、続き。続きを話しなさいよ。アルティウス」

「ええ、それでですね。
残りの二年は情報収集と敵味方の選別に明け暮れました」

「間者のエキスパート、まあ、うちの国の王様なんだけどね。
彼に頼んで優秀な間者を分けてもらったり、
私たち自身も色んなところに潜り込んだりして、誰がどういう人間なのかを徹底的に調べたわよ」

王様が患者のエキスパート？

気になったけれど、私は話を先に進めることにした。

「協力者を得るために、ですか？」

「それもある。
だが、エルラードの国を支えるのは、たとえ国がなくなってもエルラードの民の方がいい」

「そうそう。
腐ってる国の中にだって頑張ってる人たちはいる。
そういう人たちなら国が潰れた直後でも民のために働いてくれるし、
そういう人たちに協力してもらわないと、正直、異国の私たちじゃ
勝手がわからないところもあるのよね。
で、混乱を避けるためにも事前にイスターシュの内情を調べたの」

「逆に火種になりそうなのは、きちんと消しておかないといけませ
んでしたから。
徹底的にやりましたよ」

「おかげで今頃は手筈通り、俺たちが認めた者たちが尽力して、
民が混乱しないように復興作業を行ってくれているはずだ」

「でも、これだけしててもやっぱり予想外のことって起きるものな
のよねぇ」

「ああ」

ミカ様がひやりと冷たい、どこか遠いところを見るような目になる。
そんなミカ様の心の内に同意するように、皆さんもわずかに視線を
下ろす。

そんな中、ミーシェの歯ぎしりが聞こえた。

「レオンの馬鹿が、馬鹿王子の命で定例報告のために村を離れた隙
に、
これまた救いようのないバカが、貴女をイスターシュに送ったのよ」

「あのときのこと。思い出すと村を消しそうになるね」
さらりとミカ様が私の頬を撫でる。
けれど、そのゆったりとした口調に反して、目は全く笑っていらっしゃらない。
「ほんと。あのとき王子。暴れ倒していたわね。
魔力も暴走しそうになってたし」
「王妃様の必殺パンチで眠らせなかったら危なかった」
「そういうわけで、じっとしていられなかった王子は、計画の一部を変更して、
貴女を守るために側室候補として王宮に潜り込みました。
村ではレオンが貴女をかばっていましたが、
王宮に貴女の味方のための人間を用意していませんでしたから」
「私は爆破や陽動作戦をするために潜り込んでいたから、
表だって貴女をかばうわけにいかなかったし」
悔しそうにそう言うミーシェに私の心は幸せでいっぱいになる。
ミーシェはそんなにも大変な状況の中でそれでも私に心を砕いてくれていたのだ。
「そうだったのね。ミーシェ。あ。ミーシェ様」
「やだ！！様なんてつけないで！！嫌いにならないって言ったのに

！！」

わっとミーシェが泣きそうになりながら叫ぶ。

「ご、ごめんなさい。ミーシェ。でも、あなたは王家の」

ぶんぶんとミーシェは首を横に振る。

そんなに振ったら首がとれてしまいそう。

「ミーシェ。泣かないで。ごめんなさい。

あの・・・あなたさえ許してくれるのなら、これからも、その、

まるで友達のように接させて頂いてもいいかしら？」

それはあまりにもわきまえない願い。

でも、

「私たちもう友達でしょ！親友よ、親友！今さら何言ってるの！」

怒ったようにそう言われて、

（友達。親友・・・？）

じんわりと心の中にしみていく。

「友達、親友・・・本当に？」

「あたりまえでしょ！親友以外の誰が命を顧みずに助けに来てくれるのよ！」

心の中がいっぱいになる。

（私に、親友）

それも、ミーシェのような素敵な人が。

「やだ・・・信じられない」

思わずこぼれた言葉に、

「やだ?!信じられないくらいに私と親友っていうのが嫌?!
やっぱり私、爆破娘だし」

いつの間にかミーシェが私のそばに立っていて、顔を真っ青にしていた。

私は慌ててぶんぶんと首を横に振る。

「ちがう!違うわ!すごく嬉しくて。嬉しすぎて信じられないって思ったの」

「アリシア」

ミーシェが驚きに瞳を大きく見開く。

私は言葉をつづけた。

「私、親友なんてはじめてなの。
それも、ミーシェみたいに素敵な子が・・・本当に?」

「アリシア、当たり前じゃない！これは現実よ！」
ミーシェの手が私の頭に伸ばされる。
そして、ぎゅうっと抱きしめられる。
「ミーシェ」
気持ち悪くないの？
抱きしめられた瞬間に思ったのは、そんな疑問。
でも、ミーシェは肌のぬくもりで何かを伝えようとするように、
とても強く抱きしめてくれたから。
私の心に、彼女の心がじわりと流れ込んでくる。
（幸せ）
ミーシェもそうなのだとわかる。
「本当は私、ずっと言いたかったの。貴女と親友になりたいって」
ミーシェに抱きしめられながらそう伝えれば、
「私もよ！」
嬉しそうな声が返ってきた。

『でも、私は爆破娘（異形）だから相応しくないって思ってた』

二人の声が重なる。
ミーシェがぱっと私の頭を放した。
そして、二人目を合わせ、

『そんなこと、気にするわけないわ』

声が見事にはもる。
私たちは互いにきょとんと目を丸くし、

「ふふ」

「あはは！なんかおっかしい」

「私たち同じように悩んでいたのね」

「そうね。でも、これぞ親友って感じじゃない？」

「うん。・・・ミーシェ。改めてお礼を言わせて。
私、一人で王宮に連れてこられてとても不安でさびしかった。
でも、貴女がいてくれたから。
辛くても楽しかった。いつも貴女に救われていたの。
本当にありがとう」

「やだ。アリシア。お礼なんて言わないで。
あたしは全然役に立ってなかった。
貴女はどんなに虐げられてもそれが普通って顔してて。
あたし、自分がすごく情けなかった」

「ミーシェ」

そんなふうに思ってくれていたんだ。

（嬉しい）

「ありがとう」

「やだー、やばい！あたし、こういうのマジ弱いんだって」

テーブルクロスを引き上げて涙を拭くミーシェに私はひそかに決意する。

親友だと言ってくれたミーシェ。

彼女が助けてくれていたみたいに、今度は私がミーシェの力になりたい。

そして、

「ミカ」

私のために動いてくださったというミカ様に視線を移す。

胸の前で結んだ手をぎゅっと握りしめ、ミカ様を見つめる。

ミーシェとの関係がとても素晴らしいものに落ち着き、

少し落ち着きを取り戻した私には、

ミカ様に言うべきこと、確認すべきことが浮かんできていた。

こちらに向けられるミカ様の眼差しにはまだ、少し、
言葉がまとまっていない私に対する配慮の気持ちがこもっているのがわかる。

急がなくていいんだよ。

そんな声が聞こえてきそうな優しい瞳。

私は一度深く深呼吸をし、そして、ミカ様にお声をかけるべく、口を開いた。

私の価値

「今までのお話は本当、なのですか」

躊躇いがちに聞くと

「うん」

あまりにもさらりと返された返事に困惑する。

「ミカ。あの、私の自惚れだと思うのですが。
でも、その・・・あなたはとても私を大切に思ってくださっている
ような気がするのです」

「自惚れ？ふふ、全然わかっていないね」

柳眉が歪めらる。

狂おしいほどの何かを秘めた瞳が、苦しげに見える。

（目が、離せない）

瞳が囚われる。

「アリシア。僕が大切なのは君だけだよ。
僕にとってアリシアはこの世でただ一人の人なんだよ」

「？！」

私は一瞬、言葉の意味が理解できなかった。

この世でただ一人の人？

誰が？

私が？

そんなの、嘘だ。

「私はあなたにそのようなことをして頂けるほど価値がある人間では」

「それは違うよ。アリシア」

言いかけた言葉を遮るミカ様の声は優しいけれど、瞳には焦燥が含まれている。

そっと手をとられ、ぎゅっとミカ様の両手に包み込まれる。

「大丈夫。今からが始まりだよ。君に教えてあげる。君の価値を」

「私の、価値」

記憶がフラッシュバックする。

あんな子、いなければいいのに！

気持ち悪い。

痛い、ひどい！あの子の呪いよ！

ばあさんも、何もあんなの拾わなくてもなあ。

いい迷惑だよ。

村のやっかいものがこうして役にたつことが出来るんだ。嬉しいだろう？

それが――――――――――――私の価値。

そんなの。

「知っています・・・！！」

（どうか。どうか、思い知らせないで）

「私は醜くて人を不快にさせるだけの、いらない存在です」
価値なんてない。
（十分に知っているから）
「ここまでして頂けるほどの価値なんてない」
「アリシア！」
怒号と共に、私の手を掴んでいたミカ様の手に力が入る。
痛みに、思わず背けた顔を戻す。
瞳に映ったミカ様の青い瞳には強い怒り。
「いくらアリシアでもアリシアを傷つけることは許さない」
本気の声に、一瞬、体がこわばる。
でも、私の心は悲鳴を上げていて、言葉がこぼれる。
「私は知っているだけです」
自分の価値を。
価値がないことを。
痛む心が悲鳴を上げる。

思わず、挑むように強い瞳でミカ様を見ていた。
けれど、そんな私にミカ様は首を横に振る。
「アリシア。君は僕を変えた」
ミカ様が切なげに私を見つめる。
「無価値だったのは僕の方だよ。
何もかもがどうでもよくて死んだように生きていた僕を君が変えた。
人を変えた人間に価値がないとでも言うの」
「！」
「アリシア。僕を幸せにして」
「私が？」
出来るはずない。
私は人を不快にさせることしかできない。
けれど、ミカ様はまるで私の心の内を読んだように首を横に振る。
「違うよ。君にしかできない」
「わかりません！」
がたりと勢いよく立ち上がったせいで椅子が倒れる。

けれど、私は止まらない。
「どうしたら人を幸せに出来るかわからないんです」
本当はこの優しい人たちに何かできたらと願う。
しようと思う。
けれど、幸せに何てできない。
だって。
「だって・・・誰かを幸せにしたことなんてないんです」
小さくつぶやいた言葉に、皆が息をのむ。
けれど、ミカ様は勝手に激昂して止まらなくなった私の手をそっと両手で包み込み、
そのまま、自分の頬に寄せる。
「だったら僕をアリシアの初めてにして」
ミカ様はにっこりとほほ笑んだ。
「アリシア。何度だって言う。
君が大切で愛おしくて仕方ないんだ。
君がくれるものなら不幸でも苦痛でもきっと愛しい。
だから、君が僕を幸せにできないことなんてありえない。
僕ほど、君の初めてに相応しい人間はいないよ。何の心配もしなく

ていい」

「それは」

何かが違う気がする。

眉をしかめた私に対し、ミカ様のテンションはどんどん上がっていく。

「アリシアの初めての相手。
なんて素敵な響きなんだろうね。
痛くても苦しくても、素晴らしすぎるに決まっているね。
ああ。でも、きっと君は優しいから僕にとっては痛みでないことも、君は申し訳なく思うんだろうね」

「苦しいことなんて幸せじゃありません」

ミカ様はふふっと笑う。

「ほら。やっぱりアリシアはわかっていない。
アリシアがくれるものなら、僕にとってはどれほど幸せなものか。
でも、君にそんな顔をさせるのは僕も嫌だよ。
君が笑ってくれる方がずっともっと嬉しい。
そして、君が幸せなら僕も幸せを感じられる」

私にそんな価値はない。

そう言いたいのに、ミカ様の瞳があまりにもまっすぐ過ぎて否定できない。

「・・ほん、とうに？」

なんて図々しいのだろう。

でも、私の口からはそんな問いが零れていた。

その問いに、

「本当に決まっているよ」

ミカ様は満面の、“幸せそう”な笑みを浮かべてくださる。

「っ」

信じたい。

報いたい。

「・・・私でも、できますか」

「君にしかできないよ」

呪文のよう。

同じことをバカみたいに聞いているのに、ミカ様はまっすぐに答えてくださる。

私の心の何かがパキンと音を立てて崩れた。

「私も、信じたいです」

「君自身を？」

こくりと頷く。

「ミカ」

「うん」

「あなたの言葉に報いるよう、
あなたがしてくださったことに応えられるよう、
うぬぼれて、頑張ってみてもいいですか？」

「！」

ミカ様はぎゅっと私を抱きしめた。

「当たり前だよ！」

ぎゅううっと抱きしめられる。

（温かい）

温かいことは幸せに似ていると思う。

（ミカ様も温かいと思ってくださっているかな）

「まずは何から始めたらいいのでしょう」

「それはもちろん色々」

にっこり。
笑うミカ様の後ろに黒い何かが見えるような。
（？）
「って、おい！」
ぐんっと後ろに思いきり体をひかれ、
そのまま、ミーシェの背にかばわれるように、隠される。
「珍しくいいこと言うと思ったら、この変態！
アリシア！こいつの手管に飲まれちゃ駄目よ！美味しく食べられるわよ！！」
「？」
「さすが王子ですね。外道」
「アリシア。あなたが思うほどこの人は綺麗ではない。気を使う必要もない」
「ふふ。何のことかな。消そうかな」
「とにかく！アリシア！
この変態バカ王子が珍しくいいことしたこの機にのっかって、
まっとうな評価の下を歩いていけばいいのよ！」
「まっとうな評価」

「そうよ。あなたはその容姿のせいで個人としてみられてこなかった。
そんなのまっとうな評価じゃないわ。誰もあなたを見てないんだもの」

「そうですよ。アリシア様。
今までの貴女に対する評価は異形と勝手に決めつけられた周囲による虚像です」

「アリシア様。俺たちがいる。怖がらずに出来ることからしていけばいい」

「みなさん・・・ありがとうございます」

「ほらほら。そんなにしんみりしないで」

ミーシェは私の肩を優しく押して、椅子に座らせてくれる。
そして、温かい紅茶を注いだカップを手渡してくれた。

「ほら。これ飲んで少し落ち着いたらまた話の続きをしよう？」

「うん」

一口、こくりと飲めば、

（温かい）

包まれる優しさと言う温かさ。

（幸せ）

私の頬を一筋の涙が走った。

私の価値（後書き）

大分前から書けていたのですが、
前回とのつなぎを考えるとどうかなと思い、悩んで・・・結局そのままアップしました。
ミーシェという親友を得て頑張ろうって思ったアリシアですが、
それでもやっぱり、持ってる劣等感はぬぐいきれない。
それを何とかしてくれるのは、やはり、彼しかいないかな、と吹っ切って、
アップしました。

真実（7）

「話はどこまででしたっけ」

私が落ち着いた頃、途中になっていた話が再開された。

「王子が側室候補として潜入したところまでだ」

グレンさんの言葉に，

アルティウスさんは、ああそうでしたね、と頷く。

「女装までして助けに来てくださったんですね」

私はミカ様を見上げた。

優しい瞳が、私の瞳をまっすぐに見つめ返してくださる。

「アリシアと一緒にいたかったんだ。

もう限界だった。・・・別れ際の言葉を覚えてる？」

「僕と次に会うまでには勉強くらいしておけば、ですよね」

こくりとミカ様は頷かれる。

「後悔、していたんだ。

本当はもっと優しい言葉をかけたかった。

でも、一度優しい言葉をかけてしまったら、僕の方が君から離れら

れなくなる。
あのときはまだその時じゃなかった。
でも、だからと言って、あれはひどいよね」

「ふふ。いいえ。
ミカがああ言ってくださったから、
レオン様が勉強をみてくださっていたときも頑張れました。
あの言葉は、私の心の真ん中にいつもあったんです」

「アリシア」

「はい」

「はーい！ごめんね。
あとちょっとだからもう少し頑張ろうね」

いつの間に移動させたのか、
ミーシェが、私とミカ様の間に持参した椅子をどーんと置いた。

「ふふ。ミーシェったら持ってきたの？」

「もちろんよ。この王子が椅子を譲ってくれるわけないし」

「私が譲るわよ？」

「あはは。アリシア。
冗談でも私はこいつの隣になんか座りたいと思わないわよ。
私は貴女と一緒にいたいんだって」

「あ、ありがとう」

「やだー、照れてる。可愛いｖｖ」

「ミーシェ、さっきから触りすぎだよ。殺す」

にっこり微笑んで、ミカ様は席を立とうとなさる。

「はいはい、王子。落ち着いてくださいね。
まあ、あと少しですから話を先に進めますね。
とにかく、こうして王宮に乗り込んだ王子は、
アリシア様といちゃいちゃラブラブな生活を満喫し、
対照的に私たち下っ端は、それぞれ水面下で作戦を進めていました。
そして、決行日。
私たちが故意にばらまいていた噂、
“エルラードが攻めてくるらしい”という噂を聞いた王様たちが、
エルラード出身の側室候補であるエリカを呼びました。
これも作戦の上。
王家の方々にはチャンスを差し上げたのです。
自分たちだけ逃げるのか。
それとも、兵を立ち上げ、民を守るために立ち上がるのか。
・・・王たちは我先にと逃げ出しましたよ」

「その報告を受けた、潜伏中だった俺たちの仲間が、
王宮内の各地で噂を流した。
エルラードが攻めてくる。
今すぐ逃げ出せば自分は助かると」

「一目散に逃げ出した者たちを、
城の外で待ち構えていたエルラードの兵が、一網打尽に捕まえました」

「兵は王都の外ではなく、すでに城の外にいたのですか？！」
「はい。情報を操作して、王宮を完全に孤立させていたのです。
王都の皆さんには、各コミニティのトップの皆さんを介して、
わが軍の安全性を通達してもらっていましたから、
暴動は起こりませんでした。
おかげで、城の中の人々に気づかれずにすみました」

「王都は疲れきっていた。
聖なる国と呼ばれるエルラードからの正規軍だ。
逆に救世主扱いで騒がれそうになったぐらいだ。
若干の不手際で騒ぎ起こったんだが、
それも想定内だったから、一応は考慮していた範囲に抑えられた」

「そして、最後に貴女の登場よ」

「アリシア様をお連れしようと思ったのに、いなくなっていたときは焦った。
だが、王子が大丈夫だと言った通り、貴女はあの場にやって来た」

「奇跡みたいだったわ」

うっとりとミーシェが言う。

「でも、私なんかが来たところで、何もしていないのに。
どうして」

どうして、黒髪の御使いは認められたの？

口の中に含んだ疑問に、

「たしかに、そうね」

ミーシェは静かに微笑む。

「あなたは何もしていない。
全てはこの変態王子の恐ろしいほど、綿密な計画の果てに成されたことよ。
でも、忘れないで。あなたの存在が、このろくでなしを動かしたのも、また事実よ」

「貴女がいなければ、王子は動きませんでしたよ。
そして、彼が動かなければ、国の腐敗がさらに進行し、最終的には内乱にいたったでしょう」

でも、やっぱり、私は何もしていない。

「どうして、町の方々は私の姿を見て、黒髪の御使いだと？」

気味が悪いと思わなかったのだろうか。

「我々があらかじめ流していた噂で、あなたはすでに人々から感謝の念を向けられていた」

「でも、噂ばかりが先行して、あなたの姿を見たものはいません」

「皆はそれはもう、焦れまくりよ。
御使いは本当にいて、本当に自分たちを助けてくれるのか。
そんな、希望と疑問が最高潮に達したとき。

革命は起こった」

「そして、その、最後の最後に。ようやく、貴女を見ることができた」

「そのとき、王子の計画が完成したのですよ」

異形と奇跡は紙一重。

「ミカは異形と奇跡を、まさに、ひっくり返されたのですね」

鳥肌がたつ。

目の前に立つこの人はどれほどの能力があるのだろう。

こんな、単純で、でも、恐ろしいほど綿密に運ばなければ、到底、かなうことのない計画をやってのけたのだ。

「私は、どうしたら」

名前が、重い。

「怖い？アリシア」

優しい手が、私の手を包む。

「・・・今更ながら、私がどれほどのことをして頂いたのか、わかりました」

「そうだね。僕はアリシアの気持ちを考えず、大きな名前を君に与

えてしまったね」

一呼吸置き、ミカ様は言葉を続ける。

「逃げたい？」

その言葉に、私は笑った。

「いいえ」

ミーシェが友達になってくれると言った。

ミカ様が私を大切に想ってくださっていることを知った。

アルティウスさんに、グレンさんの優しい瞳を感じている。

レオンもきっと、今も私のせいで苦労してくれている。

私は、もう、一人じゃない。

「皆さんから受けた恩を、お返ししたいです」

そのためにも、この、重くて、大きな名前を背負って、歩いていきたい。

「皆さん、ありがとうございました」

私は頭を下げた。

心は決まった。

不安だけれど。

何をしていいのか、想像もつかないけれど。

ミーシェが言ってくれた、まっとうな評価、をしてもらえるように、

頑張っていこう。

そう、心から思った。

番外編：アルティウス（前書き）

もうすぐ７０万アクセス、１１万人ユニークユーザー様を迎えますので、感謝の気持ちをこめて、番外編をアップさせて頂きます。
皆様、いつも読んで頂きありがとうございます。
とても励みになります。
がんばりますので、これからも、よろしくお願いいたします。

番外編：アルティウス

君は僕の大切な人。

これは、穏やかなある日の、ちょっとした一時のお話。

＜アルティウス編＞

うららかな午後。

城の裏手にある、広い森。

その奥にある泉の傍は水のせせらぎと風が心地よく、

私は時折、そこを訪れては忙しい日常を休んでいた。

目を瞑り、ただ、自然の中に意識を溶け込ませる。

そんな静かな時間に、ふわりと、花の気配が近づくのを感じる。

「アルティウスさん？」

柔らかな声が眠る私の耳をくすぐる。
意地の悪い私は、優しい声と気配に気づいていながらも、
もう少し、この時間を楽しみたくて。
瞳を閉じたままにする。

かさり、かさり。

草を踏む音が近づく。

そして、私の真上から柔らかな声が落ちてきた。

「アルティウスさん？」

小さくて、伺うように零される声。

「気持ちよさそう」

くすり。

微笑んだのがわかる。

（もったいないことをしましたね）

意地の悪い自分に、天はささやかな罰を与えたようだ。

微笑んだアリシア様のお顔を見れなかったのを残念に思いながら、
私はまだ、眠った振りを続けた。

「いつも、とてもお忙しいですものね」
そう言って、アリシア様が傍らに座る気配がした。
そして。
ふわり。
柔らかな何かが私の体を覆う。
（これは、アリシア様の？）
大きさと肌触りからして、身にまとっていたケープだろう。
季節は未だ肌寒い。
（あなたの方が風邪をひいてしまう）
そう、思うのに。
心の中のどこかが、甘く痺れる。
こういうことを、さらりとしてしまうあなただから。
私は、瞳を開いた。
「おはようございます」
開けた瞳の先には、柔らかな黒髪。

「！おはようございます」
突然目を開けた私に、アリシア様は一瞬驚くけれど、
すぐに優しい微笑みが返してくれた。
「起こしてしまいましたか？」
「いいえ。実は、最初から眠ってはいなかったので」
「そうだったのですか？
ふふ。アルティウスさんは、意外と、いたずらっこさんなんですね」
楽しそうに笑うアリシア様から、目が離せない。
「ええ」
返事を返しながら、手を伸ばす。
「？」
何の警戒もせず、アリシア様はただ私の行動を見守っている。
可愛い人。
そして、可愛いくて、憎らしい人。
「そんなにも安心されては、手が出せないですね」
笑って。
私は、柔らかな手を取り、口づけた。

「！」

驚くアリシア様の手を離さず、上目づかいで彼女を見つめる。

「眠り姫はキスで起きるものですから」

「そ、そうなのですか？？」

頬を朱に染めて、動揺しているアリシア様は、

一瞬不思議そうな顔をしたけれど、最終的には私の言葉に何故か納得したようだ。

「ええ」

「アルティウスさんは物知りなんですね」

「亀の甲より年の功ですよ」

「？」

「ところで。もしかして、アリシア様は絵物語をあまりご存じないのですか？」

「・・・はい」

悲しそうに、寂しそうに微笑むアリシア様に、私はとても良いことを思いつく。

「よかった。では、私にも出番がありそうですね」

「？」

「よろしければ、絵物語をお話ししますよ。

とても可愛らしい絵が付いた絵本と一緒に」

「！」

アリシア様の瞳がキラキラと輝く。

「絵本！私、一度だけ見たことがあるんです」
うっとりと、過去に見たという物を思い浮かべているアリシア様に、キスしたい衝動を抑えがなら、それと同時に、彼女の悲しい過去を思う。
（王子ではなくても、憎くなりますね）
アリシア様を悲しませた、心無い人々の存在が。
けれど。
（過去の分まで、優しくしてさしあげますから）
「アリシア様。
では、さっそく今宵から、眠る前には絵本を持って、必ず伺いますね」
「！はい」
嬉しそうに微笑む貴女。
私も知らず、笑顔になる。
（なんて、愚かなのでしょう）
こんな小ずるい手に易々とかかって、狼の侵入を許してしまうなんて。
そして。
（なんて、なんてずるいのでしょう）

嬉しそうな微笑みは。

私などよりもずっとずっとずるい。

（手なんて、出せるはずがない）

向けられる信頼と愛情。

それを裏切って、もし失ってしまったら？

怖い。

怖くてたまらない。

だから、手が出せない。

（私を変える愛しい貴女）

愛しています。

その秘密の言葉を、いつか、必ず、貴女に囁きたいと思う。

「させると思う？」

この場にはあまりに不釣り合いな。
それでいて、この場に必ず来るだろうと思っていた、予想通りの声が背後から聞こえた。
背後の人物からは、ものすごい魔力が噴出している。
（はいはい。こうなることは、もちろん、わかっていましたとも）
私は笑顔で振り返った。
「アリシア様のお願いですよ？」
振り返った先にいたのは、ストーカーかつ変態の名を欲しいままにする、害虫王子。
（このクソガキ）
心の中で毒ついて、顔にはしっかり笑みを浮かべる。
どんなに強い魔力を持っていても、亀の甲より年の功。
経験というのは、魔力とはまた違った力なのです。
特に、恋ではね。
「ねぇ？アリシア様」
私は繋いだ手を再び唇に寄せ、にっこりと、アリシア様だけを見つめた。

「あ、アルティウスさんっ」

困った顔をしながら、真っ赤になる可愛い顔に、愛しさが吹き荒れる。

ぶちっと何かが切れる音がしたけれど。

私の恋路は邪魔できないのだと、知ってくださいね。

オウジサマ？

ミカエル視点：歩き出す君へ（1）

「皆さんから受けた恩を、お返ししたいです」

「皆さん、ありがとうございました」

そう言って静かに頭を下げる彼女。

（綺麗だ）

彼女の強い光を宿した黒い瞳に囚われる。

魂が奪われる。

出会ったあの日。

透き通るような美しい瞳に囚われて。

あの日からずいぶんたったというのに。

また、あの日とは違った魅力に囚われている。

（どれだけ捕えれば気がすむの？）

どれだけ囚われれば気がすむの？

「ミカ」

惑う僕に、愛らしいのに、強い意思を宿した瞳でアリシアは僕の名を呼んだ。
何か願いを口にしようとしているのがわかる。

（いいよ）

なんでもしてあげる。
なんでもきいてあげる。

可愛い。
可愛い。
可愛い。

こんなにも可愛い生き物見たことない。
こんなにも愛しい女性と出会ったことない。

心の中が、恋に惑い、冷静な意識が完璧に消失する。

けれど、そんな僕を呼び戻すのもまた、彼女だけ。

「ミカ」

「ん？どうしたの、アリシア」

柔らかそうな唇を邪な気持ちでうっとりと見つめながら、返事を返す。
すると、

「私、まずはレオン様のお手伝いをさせて頂きたいです！」

・・・。

・・・ふふ。

（他の男の名を出すなんて、アリシアは何て無邪気なんだろう）

にっこり。

僕は微笑んだ。

今、僕の頭の中でレオンは五回死んだよ。

「アリシア、貴女ってすごいわね」

僕の従姉妹は、ちらりと僕を見て、

アリシアに感心したように深く頷きながらそう言った。

「？」

僕のアリシアはきょとんとしている。

「ううん。なんでもないわ。それより、レオンね」

「アリシア様は確か薬師でしたね」

「大した薬は作れませんが」

「包帯を巻くのは得意だったのか？」

「・・・練習はしました」

アリシアの一瞬の沈黙に皆は彼女の過去を思い出し、そっと察する。
愚かな村人たちは、
彼女の善意の手を、拒んだのだろう。
（もったいない）
もしアリシアが手ずから包帯を巻いてくれるというなら、僕なら毎日腹を切る。
そして、這いながらでも、毎日通う。
「十分だ。一応騒ぎもあったから怪我人もいる。慰労訪問してやれば皆も」
「却下」
にっこり僕は微笑んだ。
アリシアが他の男に触る？
片っ端から怪我ですまない傷を負わせてあげるよ。
「はあ～、そうだった。怪我ですまなくなるわよ」
「さすがミーシェ。よくわかっているね」
嬉しくなーいと鬱陶しそうにぱたぱたと手を振りながら、
ミーシェは他には何かないか考えている。

「たくさんあるじゃないか」

『却下』

僕が提案を口にする前に
ミーシェとアルティウス、グレン。三人の声に同時に却下される。

「すみません。私が役に立たないばかりに」

「ちょっと、何勘違いしているの。
アリシアのせいじゃなくてどうしようもない変態のせいでしょう」

「・・・」

アリシアは困ったように僕を見つめる。

ああ。

その唇。

誘っているのかな。

そうだよね。

僕たちは3年と4ヶ月と17日と16時間28分26秒もの間離れていたんだから。

「温めあう？」

首筋を撫でようと伸ばした手を、
横から伸びたミーシェの手が、まるで、蝿でも払い落とすように撃ち落とす。

「・・・」

無言でにらみ合う僕らに気づかず、

「え？」

きょとんと首を傾げるアリシア。

すると、

「食事だ」

グレンが口をはさんだ。

「王子スルーはいい感じだけど、急にどうしたの？グレン。今食べたばかりじゃない」

「ミーシェ。違いますよ。グレンが言っているのは配給係の手伝いです」

アルティウスが彼女の間違いを訂正し、補足する。

グレンは小さく頷き、

「町は長年の腐敗政治で物が足りていない状況だ。そこで早速炊き出しをして市民に食事を配給している。

それに加えて、復興支援中の我が軍や、
事前に協力を得ていたイスターシュ貴族個人の兵たちの食事も、炊き出ししなければならない」

「なるほど。兵の炊き出しは現在王宮にて行っています。
あそこはアリシア様の前の職場。きっと強力な助っ人になって頂けますね」

アルティウスの言葉にアリシアは力強く頷く。

「はい。私、水汲みとか皮むきなら得意だと思います」

アリシアの言葉にミーシェが首を横に振る。

「アリシア。違うわよ」

「ミーシェ？」

「アルティウスが言っているのは配給。配る方のことよ」

「それは」

途端に暗い表情になってしまったアリシアに、
僕の、今までは存在していないと思っていた、“僕の心”がツキンと痛む。

「大丈夫だよ。アリシア」

そっと彼女の腰を抱く。

「ミカ？」

「君の配給を拒むわけないよ。むしろ、僕が君の配給を全てもらう」

「って、それじゃあ配給になんないでしょう！」

「ええっと」

アリシアが困ったように視線を僕に向けるから、僕はその魅力に負けてしまう。

「配給。嫌だったらしなくてもいいんだよ？」

「嫌だなんてとんでもないです！
ただ私から受け取る方のほうが嫌な思いをなさるんじゃないかって」

「アリシア」

僕は彼女の頬を優しく包む。

（本当はこんなこと言いたくない）

君を甘い鳥かごに入れて、
誰にも見せず、誰にも傷つけさせず、僕だけを見つめてくれるようにしたい。

（でも）

それは君の本当の幸せじゃない。
だから。

「君は黒の御使いになるんだろう？」

「！！」

その言葉にアリシアの瞳が大きく見開かれる。

そして、

「はい・・・！」

力強い瞳で首肯する。

僕は複雑に微笑んだ。

（君が飛び立ってしまう）

僕の暴力的なまでの魔力がうずく。

彼女を引き留めたい。

引き留めろと騒ぎ出す。

けれど、

「ミカ、ありがとうございます」

ああ

可愛い。

なんて可愛いんだろう。

「強いアリシアも可愛いね」

「？！」

ぽんっと赤くなるアリシアも。

「きっと、もっとたくさん、素敵な顔をみせてくれるよね？」

「ミカ？」

僕は微笑んだ。

「だから、君を応援するよ」

「うわあ、マジで恐ろしいくらいに空気を読んでる・・・！」

ミーシェの呟きを無視して、

「行っておいで。アリシア。君の最初の一歩の始まりだよ」

僕は彼女の背を押した。

「ミカ。ありがとうございます！私、頑張ります」

キラキラ光る強い意思を持った瞳に見惚れながら、僕は片手をあげ、扉を指差した。

荒れ狂う魔力を扉へと集中させる。

「・・・」

一呼吸置き、

「アリシア。扉をつなげたよ。あれをくぐればエルラードだ」

「超上級魔法を・・・さすがですね」

アルティウスの乾いた笑みも無視して、

「僕の気が変わらないうちに」

「よし、今すぐ行こう」

グレンが軍人らしく素早い動きでアリシアを誘導する。

触れないあたりが流石グレンだ。

（今、僕の目の前でアリシアに触れる者がいたら、
僕はあの扉の先をベッドに変えてしまってただろうな）

「ミカ。私、ミカがくださったチャンスをきっと活かしてみせますから」

「そんなに力まなくていいんだよ」

「ありがとうございます」

（頑張る気満々だね）

でも、疲れて帰ってきたら僕が思い切り甘やかしてあげればいい。
（もしそれで僕の腕の中を心地いいと思ってくれたら。
そして、もう外に行きたくないと思ってくれたら万々歳だし）
「いってらっしゃい」
僕の言葉にアリシアは扉の前で振り返り、
「行ってきます」
微笑みを残して、扉をくぐる。
彼女が違う場所へ行く。
離れる。
たったそれだけのことで胸を刺す痛み。
刃物で突き刺されたみたいだ。
「我慢ですよ、王子」
「アリシアを頼むよ」
僕の言葉にアルティウスは頷くとそのまま扉をくぐる。
（僕は一緒に行けない）

彼女の戦いの邪魔をしてしまうのは目に見えているから。

「お任せください」

「誰に言ってんのよ」

グレン、ミーシェがそう言い残し、扉をくぐった。

ミカエル視点：歩き出す君へ（2）（前書き）

長くなったので分けていたのですが。
ちょっと、短いアップです。

ミカエル視点：歩き出す君へ（2）

そして、部屋には僕一人になる。

残された僕は誰もいなくなった部屋で静かに瞳を閉じた。

彼女の不安を思う。

でも。

「大丈夫だよ」

受け取らない人間がいたら奇跡を起こしてあげるから。

そうしたら、きっと皆が君からの皿を競うようにして欲しがるだろう。

人と言うのはとても単純だから。

「きっとうまくいくから」

そう考えて、頭の中の彼女が、咎めるように眉を寄せる。

（そうだね。君はズルは嫌だよね）

だったら僕には何が出来るだろう。

この手にある無限の魔力、無限の力。
全てを彼女のためだけに使いたいのに、
彼女が本当に欲しがるものは与えてあげられない。
もどかしい。
けれど、生まれて初めての“不可能”に燃える自分もいる。
（君が望むものを必ず掴ませてあげるから）
だから、
“一緒に”
がんばろう。
「本当は他の人間なんかに見せるのも嫌なんだけど」
（でも、僕の一番の願いは、君の願いを叶えること）
君が幸せになること。
だから、この心のうちに広がる、君には想像もつかないだろう想いを隠して。
君とともにまともに世界を生きてみよう。
「大丈夫、僕がいるからね」

心の中で彼女が微笑む。

よかった。いい笑顔だ。

「君は僕のご主人様、かな」

その笑顔があれば、君は僕を自由に操れるよ。

愛しい黒髪の御使い。

レオンの災難

「レオン様！」

がくっ

愛しい彼女の姿を見つけて駆けだしていた俺は、
そのままズベベッと地面にスライディングした。

駆けてきた、俺の愛しい愛しい宝物。

3年もの間、一緒にいたのに。

「どうして急にそんな他人行儀なんだ！！」

地面から這い上がり、叫ぶ。

正直、泣きそうだ。

将軍職について5年。

反乱軍やエルラードとのいざこざで、戦場での経験も豊富な俺だが、
それほどに衝撃的だった。

「シア！一体どうしたんだ。
あれか。俺がおまえから目を離した隙にひどい目にあったから、怒っているのか？！」

自分の言葉に気づく。
そうだ。
彼女をひどい目に合わせてしまったくせに、こうしてのうのうと顔を合わせるなんて。
俺は何てバカなんだ。
「せめて土下座で」
いや。足りない。
切腹するか？
アリシアが許してくれるなら、これほど幸せな冥土の土産はない。
「レオン様？急にこけて大丈夫ですか？具合が悪いのですか？」
両膝をついた俺にアリシアが優しく触れてくれる。
その心配そうな瞳には怒りも恨みもない。
「シア。そうか。そうだな。
シアはいつだって優しいから俺みたいな間抜けにも優しい」
「レオン様？なんだか少しお会いしないうちに雰囲気が変わられましたね」
「ああ。村にいた頃は結構気を張っていたから」

「私のために無理をしてくださっていたのですね。
ありがとうございました」

「無理なんかしてない」

「みなさんからお聞きしたんです。
将軍職にあるレオン様が私なんかのために村に留まってくださっていたと」

将軍職。

なるほど、シアは全てを聞いたのか。

「それで敬語に敬称か」

いけすかない王子の顔を思い出す。

あの男。

俺とシアとの心の距離を遠ざけるために、また小賢しい真似をしやがったな。

「シア。俺たちは何も変わらない。
俺はただのレオンだし、シアはシアだろう？
それとも、シアはもう俺を友達だと思ってくれないのか？」

俺の言葉にシアが大きく目を見開く。

くりっとした大きな瞳はとてもかわいい。

「レオン。私のこと友達だと思ってくれていたの？」
「当たり前だろ。任務を除いてもシアとは友達だ」
「レオン」
アリシアが両手を伸ばし、俺に抱き着こうとしてくれる。
俺は訪れる幸せの瞬間を目を閉じて受け止めようとし、
「アリシア。人を間違っているよ」
すっと伸びてきた手が俺の宝物を横から掻っ攫った。
「おまえっ！！出たな！！この極悪変態王子！！」
「はは。来てよかった。
感傷ぶって我慢というものをしてみようかと思ったけど、
やっぱり我慢なんてするもんじゃないよね。
ところで、君こそ止めてよね。アリシアを愛称で呼ぶなんて。
君の出身地はどこだったかな？」
王子の隣で、爆弾娘が瞼を掌で押さえ、「あー、五秒しかもたなかった」と天を仰いでいる。
「おまえ本気で極悪最低だな。今の本気の脅しだろ」
「さあ？」
「シア！逃げろ。そいつは本当に性質が悪いぞ」

「はいはい。将軍。興奮すると体に悪いですよ」

「アルティウス。
おまえ、俺よりウン百年年上のくせに年寄扱いするな！俺はまだ２８だぞ」

「ああ、滅ぼしたい」

「王子、黄昏てる振りしてこっそり魔力放出してんじゃねぇ！」

「・・・レオンってあんなに激しい性格だったのね」

「アリシアの前では猫かぶってたんでしょ。
まあ、普段の彼はそこそこまともなのよ？
ただ、こいつらと絡むと突っ込まざるを得ないのよ。主に変態王子とか」

「ふふ。でも、こっちのレオンの方が好き。楽しい」

「そ、そうか！」

「うん」

いつの間にかアリシアの表情は昔に戻っていた。

二人の間にあった妙な緊張も消えている。

「シア」

「レオン。改めて、長い間ありがとう。
それから、あの、これからもお友達でいてくれる？」
上目づかいで聞くなんてシアは俺を殺す気か！
「当たり前だろ！」
「よかった」
「俺もほっとした」
やっぱり俺たちの三年は、変態バカ王子の邪すぎる策略でも消えないってことだよ！！
俺は心の中で勝利の爆笑をする。
「はいはい。よかったですね。将軍殿。
ということで、わだかまりも王子の地味な策略も消えたところで。
アリシア様を案内して頂けますか」
「案内って」
言いかけて皆の思惑に気づく。
「なるほどな。うーん。あれはこいつが了承するわけないから。
とすると、料理場か？」
「さすがですね」
「だったらシアの方が詳しいかもな」

「もしかして、私たちが働いていたところで炊き出しの準備をしているの？」

「ああ。大きな鍋もそろってるし動きもいいからな」

「・・・・」

「不安に思うことはないさ」

ぽんっと頭を撫でる。

大きな瞳が俺を見上げた。

「シアの良さは余計な偏見の陰に無理やり隠されていただけだ。本当のお前をみれば、皆自分の考えが違ったって気づけるさ」

「私の良さ？」

「ああ。シアが優しくて根性あるいい女だってことだよ」

「友達の欲目、だと思うのだけれど」

「自信持っていけ」

「ふふ。はい」

しっかりと受け止めるように力強く頷いたシアに、俺はシアがまた強くなったことを知った。

（シアは自分の足で立とうとしている）

今まで恵まれなかった、温かな気持ちに囲まれて。

（シア）

どこまでも大きくなればいい。

ここにいる連中はそんなシアにどこまでもついていくから。

安心して。

どこまでも。

「シア、頑張れ」

小さな俺の呟きに、シアはふわりと微笑んだ。

俺の胸に、また。

消えない炎がともる。

一日ぶりの再会（前書き）

久しぶりの更新で、お話の流れ上、まじめな感じです。
萌えはないかな（汗）
久しぶりのアップなのにすみません。
萌え？は次回、がんばります

一日ぶりの再会

「アリシア」

そっと手を取られる。
振り返ればミカ様が私の手をご自分の両手で包み込んでいた。

「ミカ？」
「傷を作ってはいけないよ」

ミカ様の視線の先を見れば私の手には爪の痕がついていた。
ミカ様が止めてくださらなかったら，
そのまま血が流れるまで気づかなかったかもしれない。

（緊張して力が入ってしまっていたのね）

黒髪の御使い。

それはミカ様が、そして、多くの方が協力して作ってくださった、
偽物の私。

でも、異形から人の役に立てる人間になるために、私に残された唯一の道。

今は偽物でも、本物にしたい。

皆さんの努力に応えたい。
ミカ様の期待に応えたい。
そう思うとまた手に力が入りそうになる。
「アリシア。大丈夫。僕がついているよ」
「ミカ」
「新しい一歩だよ。頑張っておいで」
私の手にそっと唇を寄せる。
そして、私をくるりと回らせて扉と向かわせ、
「行っておいで」
そっと背を押す。
体に入っていた余計な力が抜けた。
「ミカ、ありがとうございます」
ミカ様が下さった勇気をぎゅっと抱きしめる。
もう大丈夫。
私にはミカ様がいてくださる。

そう思うと傷つくことも怖くない。

（出来ることを一生懸命やるしかないの）

だから、傷ついてもやるしかない。

ミカ様に見られても恥ずかしくない行動をとるだけ。

そうすれば傷ついてもきっと何度でも立ち上がれる。

私は一日ぶりの、調理場へと足を向けた。

そして、扉を開け放つ。

「し、失礼します！」

一瞬噛んでしまったけれど、大きな声で挨拶できた。

その声に、忙しく働いていた皆の動きがぴたりと止まる。

一斉にこちらに視線を向けられた。

心臓が爆発しそうなくらいドキドキいっている。

「あの」

「アリシア！」

「うそっ、本物?!」

私の言葉をかき消して、皆が騒ぎ始めた。

同僚だった皆がわっと近寄ってきて、私を取り囲む。

「あんたが隣国の王子様に頼んでくれたって本当なの?!」

「町では食べ物が行きわたってて、皆すごく喜んでるよ!」

「王子様と知り合いだなんてどうして言ってくれなかったのよ」

きゃあきゃあと興奮気味の皆に、私はしどろもどろする。

それに、質問の内容。

尋ねられても答えられるはずがない。

私は一切かかわっていない。

全て、ミカ様がしてくださったこと。

「あの」

何も言えなくて言葉に詰まったとき、

?

「でも、昨日は隣国が攻めてきたから逃げろって言いに来たよな?」

「ああ」

「知ってたならなんだって混乱させるようなことを言いに来たんだ?」

不思議そうに何気なくそう呟いた声が、とても大きく聞こえた。

「それは」

私が勝手に行動したせいで、ミカ様たちの計画に穴が出来てしまったことを悟る。

（私がおとなしく部屋にいればこんな疑問が出ることはなかったのに）

どうやって誤魔化せばいい？

一瞬そんなずるい考えが浮かんだ。

それを振り払うように首を横に振る。

（ううん。誤魔化す時点で間違っているわ）

何の努力もせずにミカ様たちがくださった，

過剰な評価を甘受しようとした罰なのだろう。

嘘はこんなにも早くほころびを見せた。

（でも、きっとこれでいいんだわ）

正直に言おう。

（ただし、ミカ様たちの努力を水の泡にするようなことまで言ってはいけない）

そのためにはどうしたらいい？
一瞬のうちに頭がフル回転した。
そして。
私は顔をあげてみんなを見つめた。
「隣国の王子様と出会ったのはずいぶん前です。
それからは連絡さえとっていなかったのだけれど、
殿下は私との出会いを機に、
この国の行く末を考えてくださったみたい。
そして、こうして今回、国の解放を行ってくださったの。
私は、殿下がおっしゃるような偉業何てしていません」
「じゃあ、もしかして、
今回こんなふうに国が解放されるって知らされていなかったの？」
こくりと首肯する。
「殿下のお心に私のどんな言葉が影響を持ったのかもわかりません。
でも、そうして気にかけて行動してくださったのは、全て殿下のお心ゆえです」
皆がじっと私を見つめる。
私はその視線を受け止めて、
「すみません。

殿下が言ってくださるほど私は役に立つ存在ではないんです。でも」
「だったら余計にあんたに感謝するよ」
「アンナさん」
ずいっと人ごみの中現れたのはアンナさんだった。
「偉い人たちの間で何があったかなんて、あたしたち下っ端には微塵もわからない。
でも、あんただけが私たちを気にかけてくれたのは事実だ。
だから、感謝するよ。
あんたは確かに私たちにとっての黒髪の御使いさ」
言葉を切ると、アンナさんは深く頭を下げた。
「本当にありがとう」
「アンナさん！」
慌てて頭を上げてもらおうと近寄ったけれど、
「ありがとう」
「ありがとう」
アンナさんに続くように皆が頭を下げてくれる。
「皆さん・・・こちらこそ、ありがとうございます」
私も頭を下げた。

こんな私に感謝してくれるなんて。

「こらこら。あんたまで頭下げてちゃ何のためかわかんないだろ」

アンナさんが苦笑する。

顔を上げると、アンナさんにつられて皆も顔を上げ、笑い出す。

私も思わず頬を緩めていた。

「すみません」

「ふふ。あんたはやっぱりあんたなんだね」

「え」

「いいや。なんでもないよ。

さあ！それより。調理場は今日も大忙しだよ。

この国の復興のために力を貸してくださっている騎士様たちに食べて頂くんだ。

皆、気合入れていくよ！」

『おう！』

アンナさんの言葉に皆が答える。

そして、

「アリシア。また後で話を聞かせてよ」

「アリシア。本当にありがとうね」
そう言ってそれぞれの仕事へと戻っていく。
その背を見送ってから、
「アンナさん」
「わかっているよ。あんたには騎士様たちへの配給の仕事をしてもらうからね。
何杯も汲むから結構力のいる仕事だよ。頑張りな」
「はい」
「・・・アリシア」
「はい」
「あんた、本当はこんなにも綺麗だったんだね」
「え」
「いいや。なんでもないよ！さあて、仕事だ。仕事」
「・・・」
誤魔化すようにアンナさんは去って行く。
私はその後ろ姿を見つめながら、何かが変わった気がしていた。

初めての言葉（前書き）

短くてすみません。
次はもう少し早くアップするようにします・・・！

初めての言葉

アンナさんから渡されて配給係用のエプロンをして配給所に立つと、

「黒髪だ」

「黒髪の御使い様だ」

兵士の方々がざわめく。

私はぎゅっとお玉を握る手に力を込めた。

（大丈夫。笑顔、笑顔）

ここに来る前にミーシェにアドバイスをもらった。

それは、笑顔。

そして、変に卑屈にならない強い心を持つこと。

私はにこりと微笑んで、

「お待たせいたしました。

みなさん、お仕事お疲れ様です！夜勤明けの皆さんから是非召し上がってください！」

躊躇いがちに騎士や兵士の方々が配給所へと集まり始める。

大きなお鍋から熱々のシチューを汲み、大きな器へと入れる。

「お疲れ様です」

「あ、いえ。ありがとうございます」

躊躇いがちに受け取ってくださる。

（嬉しい！）

器を捨てられることも、投げつけられることもなく。

こうして、お礼まで言っていただけるなんて。

（なんて幸せなんだろう）

と、喜びに浸っている暇なく、次々と人がやって来る。

私は零さないように気をつけながら、次々に器にシチューを入れていく。

「お待たせしました」

「熱いので気をつけてくださいね」

一人一人に声をかけながら渡していく。

「お疲れ様です」

一人の兵士に同じようにそう声掛けすると、彼はにこりと微笑み返

してくれて、

「御使い様は良い笑顔をなされるのですね。癒されます」

「え！」

驚く私に、兵士の方はにこりと微笑み、そのまま去って行った。

どきどきと私の心臓が音を立てる。

かああっと頬が朱に染まった。

（だって）

笑顔を褒められたことなんてほとんどない。

それも、一目合っただけの人に。

（嬉しい）

気持ち悪くないかな。

変じゃないかな。

気分を悪くさせていないかな。

色々な不安があったから。

『癒されます』

褒められた言葉も嬉しかったけれど、そんな言葉は初めてで。

（私の存在は人を不快にさせるだけじゃなかったんだ）

そう、初めて思えた。

もっと、頑張りたい。
もっとたくさんの人の役に立ちたい。
そして、認めてほしい。

そんな欲張りな気持ちが湧いてくる。

「お疲れ様です！」

私の声は知らず大きくなり、笑顔はより元気いっぱいになっていた。

初めての言葉（後書き）

いつも、読んでくださってありがとうございます。
１００万アクセスも突破し、本当に、みなさんのおかげです！！
これからも、頑張りますので、いつも遅いアップですが、見捨てず、
お付き合い頂ければ幸いです！
よろしくお願いいたします。

温かいシチュー

私がお手伝いを始めて、１０日が経った。
イスターシュの腐敗した国政は根深く、
レオンたちはその掌握と改正に走り回っている。
ミカ様は。
とてもお忙しいはずなのに、そうとは思わせない穏やかな微笑みをたたえ、
よく私のもとを訪れて激励してくださる。
ミカ様のご期待に、少しでも恥じないようにと頑張っているのだけれど。
もっともっと頑張らなければ、いけないと思う。

そうして。
十日目の夜も更けた頃。

「お疲れ様」
「ミーシェ！」

配給を続けていた私のもとにやってきたのはミーシェだ。
今は丁度、誰もいない。
私は配給所から飛び出し、彼女の下へかけた。
「ミーシェ！」
「ふふ。久しぶり！アリシア！」
駆けてきた私を、ミーシェがぎゅっと抱きしめてくれる。
「！」
「あら。体を固くしちゃって可愛い反応！
アリシア、親友同士が久しぶりの再会を喜ぶのだもの。ハグは当然よ！」
「そうなの？ふふ。でも、確かにとても嬉しいから。とても良い慣習ね」
「うんうん。いい笑顔。楽しくやってるみたいでなによりだわ」
「ええ。皆さん、とてもよくしてくださるの。兵士の方たちも話をしてくださったりするのよ」
「あら。それはよかったわね！
（まあ、あの変態王子にとってはえらいこっちゃでしょうけど。おほほ。いい気味？）」
「ミーシェ？何か言った？」

「いやいや。良い傾向だなって思っただけ。
それより、いつもこんなに遅いの？
もう夜も遅いし、夕飯の時間も過ぎたからピークも済んだんでしょう？
城には貴女用の部屋もあるんだし、一緒に戻らない？」

「ありがとう。
でも、騎士様や兵士の皆さんは、皆夜中も交代で働いていらっしゃるし。
それに、私に出来ることはこれくらいだから」

本当はもっと大変な調理場の方を手伝いけれど、皆に断られてしまった。

「アリシア。貴女が朝からずっと働いているっていうのは、噂になってるわよ。
配給の仕事は体力勝負でしょう。大丈夫なの？」

ミーシェの言葉に私は苦笑するしかない。

だって、本当はもっと大変な仕事があることを私は知っている。

こんなの、本当に楽な仕事なのだ。

それなのに、皆に感謝されて。

「これが大変だなんて言ったら、申し訳ないわ。
とても楽しくて良いお仕事だもの。
私にはもったいないくらいだわ。

だから、このくらいさせてほしいの」
「アリシア・・・仕方ないわね。貴女は意外と頑固なんだもの」
ふふっと笑うミーシェ。
私も笑い返す。
「でも、無理しちゃだめよ」
「ありがとう」
「どういたしまして。っと、それじゃあ私は行くわね」
ミーシェの視線がふと反れる。
その先にはミーシェを待っているような風の、男女の姿。
きっと、彼女の部下なのだろう。
「うん。ミーシェこそ無理はしないでね」
「わかった」
にこっと笑みを返し、ミーシェはそのまま城の方へと歩いて行く。
その背を見送りながら、
（きっと、ミーシェには他にもたくさんの仕事が。
出来ること、ミーシェにしかできないことがあるんだ）
彼女の堂々とした後ろ姿を見送りながら私は焦燥にかられる。
何が出来るだろう。
何をすればいいのだろう。

（せめて私にもミーシェのように特別な知識があれば）

黒髪の御使い。
ありがとう。

私には過ぎた言葉に、少しは報いることができたのではないだろうか。

でも、私がしていることはただの配給だ。

作ったわけでも、運んだわけでも、何でもない。

（ううん。駄目ね。出来ることを一生懸命やるって決めたでしょう）

物思いにふけっていると。

「すみません。遅くなってしまったのですが、今でも食事ができますか」

兵士の方が申し訳なさそうにやってきた。
けれど、とてもお腹がすいているのだろう。
彼の視線は並ぶ料理にまっしぐらだ。

（ふふ、本当にお腹が減っていらっしゃるのね）

「勿論です。夜遅くまでお疲れ様です。すぐにご用意しますね」

他の給仕係には休んでもらっている。
ミーシェが言うとおり、夜も更けた頃というのは、訪れる人がまばらなのだ。
私一人で十分対応できる。
「パンが冷めてしまっているので、鉄板で焼いても構いませんか？」
私の問いに兵士は嬉しそうに笑った。
「勿論です。うわあ。嬉しいなあ。
実は朝から何も食べてないんですよね。
だから、こうやって、食事にありつけるだけでも嬉しいのに、
温かい物が食べれるなんて・・・本気で嬉しいです」
「朝からですか」
「はい。私は、もともと、王都の外れに臨時に立てた孤児院の警護を任されたんですが。
とにかく孤児の数が多くて。
それも、町で見つかるたびに、こちらに連れてこられるから、数は増える一方です。
そのせいで、警備にあたっていたはずの私たち兵までが、子供たちの世話をすることになったんですよ。
子供の世話なんてしたことのない男ばかりで、現場はパニック状態ですよ」
「孤児・・・」
「はい。って、こんなこと、女性にお聞かせする話じゃ」

ご飯に目がいっていた兵士が苦笑しながら顔を上げた。
そのとき。

「あ、あなたは！！！」
「？」
「く、黒髪の」

言いかけた言葉に私はびくっと肩を震わせた。

気持ち悪い。
そう続いたら。

けれど、私の勝手な恐怖心に対し、兵士の方は恐縮した様子で言葉をつづけた。

「す、すみませんでした。貴女様が給仕係をされているなんて。
えっと、夜でちょうど闇に黒髪がまじっていて気づかな・・・って、何言ってるんだ。俺は」

焦る兵士さん。
異形に対する嫌悪感があるわけではなく、
ただ、突然の黒髪の御使い、にびっくりしているだけなのだとわかる。
そのあたふたとした様子がとても好感がもてて、

「ふふ」
「え」

思わず笑ってしまった私を、兵士さんがびっくりした顔で見つめる。

「すみません。笑ってしまって」
「い、いえ」
「あの。私のこと気持ち悪くないですか」
夜も更けて人があまりいなかったせいか。
それとも、この兵士さんがなんだか気さくな感じがしたからだろうか。
この人なら聞いても正直に答えてくれるような気がして、思わず尋ねてしまっていた。
「まっ、まさか！！」
兵士さんはぶんぶんと首が取れそうなほど激しく首を横に振る。
その答えに私は心がふわりと温かくなる。
「ありがとうございます」
「え？いえ。お礼を言われるようなことは」
きょとんとする兵士さんに、私は微笑んだ。
「！」
兵士さんがびくっと肩を震わせる。
どうしたのだろう？
「どうかなさったんですか」

「い、いえ！」
またぶんぶんと首を激しく横に振る。
その顔は少し赤くなっている気がする。

と、丁度パンが香ばしい香りを放ちだした。
パンをお皿に取り、同時に焼いていたハムや野菜も盛り付ける。
最後にシチューを碗に注ぐ。

「お待たせしました」
「うわあ！豪華だ！」
「夜中まで頑張ってくださっているから、ちょっとおまけしました」
「！ありがとうございます！」
「こちらこそ、遅くまでありがとうございます。
あちらに食事スペースがありますから、ゆっくり召し上がってくださいね」
「！」

私の言葉に、兵士さんは瞠目し、そして、それまでのハイテンションから真剣な表情へと変わる。

「あなたはやっぱり黒髪の御使いですね」
「え？」

ふわりと微笑むと、

「それじゃあ、本当にありがとうございました！これで、明日も頑張れそうです！」

そう言うと両手に料理を持ちながら器用に駆けて行った。
その元気な姿に思わず微笑んだ。

小さな星の行く道は（1）

（元気の良い方だったなあ）

再び静けさが返り、私はぼんやりと空を見上げた。
空には満天の星。

《お前の両親は、この光る星になって、いつまでもおまえを見守っているんだよ》

おばあ様の言葉を思い出す。
孤児だった私を育ててくれた人。

（孤児、か）

先ほどの兵士さんの話を思い出す。

（私には、いろいろなことを教えてくださったおばあさまがいた。
でも、町の孤児にはそんな方いないんだわ）

そう考えて、ふと頭の中を何かが横切る。

＜せめて私にもミーシェのように特別な知識があれば＞

＜とにかく孤児の数が多くて＞

「・・・」

私は静かに瞳を閉じた。

ミーシェにしかできない仕事

兵士さんたちには難しい孤児たちの世話

「おばあさま・・・」

私は瞳を開き、答えを探すように天を仰ぐ。

瞬く星が、何かを伝えているような気がするのに、なかなか、答えが掴めない。

もどかしい。

私は視線を落とし、自分の手を見つめた。

「あ」

ふと気づく。

今までは、誰もが、私の触ったものに触れることを拒んだ。

だから、披露する場がとても少なかったのだけれど。

それに、自信がなくて、とても“ある”とは言えなかったけれど。

でも。

（私には薬の知識があるわ）

おばあさまが授けてくださった、小さくとも確かな知識が。

勿論、正式に学校で習った方々に比べれば些細なものだろう。

けれど、この王都に送られるまでに旅し、

立ち寄った小さな村では、薬師がいなくて困る人々がたくさんいた。

（私のように些細な知識でもいい。

けれど、確実な知識がいくつかあれば、それで助かる人もたくさんいるはず）

それに。

黒髪に黒い瞳という異形でなければ、薬の知識はその人自身の生活の糧にもなる。

（知識は人を助けるわ）

自他ともに限らず。

どうして今まで気づかなかったのだろう。

（おばあさま）

亡き、優しくも厳しかった祖母を思い出す。

（おばあさまが授けてくださった知識は、

孤児の私を助けるには、十分すぎる知識だったはずなのですね）

今までは世界が小さすぎて見えなかった。
異形だからと、全てを諦めていたから見えなかった。
そして、授けてもらっていた知識と言う宝物さえ、勝手に意味のないものだと決めつけていた。
けれど。
異形と言う敷居を取り除けば、
私という人間がいかに小さいかを思い知るけれど、
それと同時に確かな知識があることも思い出せた。
（私のような孤児にも、知識があれば）
そうすれば、生きていくことができるはず。
一度気が付けば、小さくて熱い思いが胸を焦がす。
（おばあさまが私にしてくださったように、両手を広げたぶんだけでもいい。
孤児を助けることができたら）
自分がしてもらったみたいに。
私は広がる空を見上げた。
今すぐに駆けだして、町の外の孤児院を手伝いたい。
そして、場が落ち着いたら、

この些細だけれど確かな知識を子供たちに教えて、小さな村で生計を立てれるようにしてあげたい。

大きな町ではかすんでしまう星も、
きっと、小さな村では輝くことができるから。

（おばあさまが私にしてくださったように）

黒髪の御使いという名として、恥ずかしくない行動をと思っていたけれど。

小さな手でしかないことに変わりはない。

（分不相応な身分を急に与えてもらって、甘受してもそれは私じゃない）

だからせめて。

見方を変えてくださったことを機に、出来ることから始めてはだめだろうか。

それでは、ミカ様たちが揃えてくださった舞台を無にしてしまうことになるのだろうか。

「ミカ様」

（ミカ様がくださった、私自身を見てもらえるこの機会を、
私自身の小さな手で出来るぶんだけのことしかしないのは、

あなたを裏切ることになりますか）

小さな星の行く道は（１）（後書き）

気づけば１２０万アクセスを突破しており、お気に入り登録してくださっている方が２０００人近くも！
ありがとうございます。
また、感想など頂けると参考＆ａｍｐ；励みになります。
のろま更新ですが、これからもよろしくお願いいたします。

番外編：ミーシェの回想（前書き）

ユニークアクセス数２０万突破を記念して書かせて頂きました。
感想など頂けると励みになります。
これからも、よろしくお願いいたします。

番外編：ミーシェの回想

ばんっ！

急に勢いよく開いた扉に、

会議に出席していた国の重鎮たちは一斉に振り返った。

その先には金色に輝く髪をなびかせた、美貌の、彼らの王子の姿。

「っ」

その姿を見た瞬間、私は息をのんだ。

（あのバカ、ついに・・・）

あの瞳。

キラキラを通り越して、もはやギラギラ、ドロドロ、ピッカピカと輝くあの瞳は。

（『出会ってしまった』のね）

心、血肉湧き躍らせる存在に。

いつもは冬の濁った空を思わせる青い瞳が、今は力強さと情熱に燃え、そして、狂おしいほどの感情を内包して光っている。

「今から隣国を支配下に置くことにしたよ」
ミカエルは突然、そう宣言。
『？！』
室内がさらにざわめく。
けれど、彼はその雑音を一切気にしていない。
これは決定事項なのだ。
「ということで。これから色々と人手がいるんだ。
だから、僕を王位第一継承者にしてくれるかな」
疑問形でも願い出る形でもない。
さっさとしてくれる？
そういう意味の聞き方だ。
皆の困惑した視線が、一斉にこの会議室の長であり、
この国の決定権の全てを有する国王へと注がれる。
「・・・王子よ。本気なのか」
「勿論だよ」
「・・・そなたが、エルラードのために献身すると誓うのならば前

向きに考えよう」

あまりに突然の無礼な振る舞いを咎めることなく。

そう譲歩を口にしてくれた王に対し、

王子はにこりと微笑みを返した。

「冗談でしょう。

僕の全てはたった一人の彼女のものだよ。

エルラードごときに献身するわけなんてないよ」

「・・・・」

「・・・・」

「・・・・」

「・・・・」

あまりに爽やかな笑顔に、逆に、皆の方が言葉を失う。

けれど、ミカエルは微塵も気にした様子がない。

「でも、幸いだったね。

“僕の彼女”はとても優しくて愛おしい人なんだ。

彼女はきっと国民のことを大切に思うだろう。

だから、この国は、彼女を手に入れられれば、この僕ももれなく付いてくるんだよ。

よかったね」

何て傲慢で、とち狂った言葉なんだろう。
皆がそう思っただろう。
でも、
（確かに、あんたの言う通りなら。
この国にとっては、まさに、奇跡のような吉報ね）
重鎮たちもそれをわかっているはずだ。
眠りまくりのダメ龍が、条件次第では国のために働くと言っている。
（このチャンスに賭けてみないなんて、それこそ、トチ狂ってるわ）
それほどに、この男は。
認めるのがものすごく嫌だが。
でも、確かに、国にとって、『ものすごい利益』になると明言できるほど、
全てにおいて優れた、底知れないほどに優秀な、逸材中の逸材なのだ。
皆の視線の中、王はため息を零す。
そして、
「今日中には答えをだそう」
その答えに、

（そう言うしかないでしょうね）

そう、心の中で呟く。

これは、一部の者しか知らないトップシークレット中のシークレットだが。

実は、この王は本物の王ではない。

影武者なのだ。

本物は、一族の血にそぐわず、密偵という厄介な趣味があって、今は、大好きな密偵仕事をするために、他国へ行っている。

ほぼ全てを一任されている、優秀な影武者とはいえ、ことは王位継承権にまつわること。

さすがに本物の承諾をとらなくてはまずいので、彼はこう言うしかないのだ。

王子も勿論、これを知っているはずだ。

彼はにこりと微笑み、

「いいよ。

それまで仲間集めでもしてくるから、なるべく早く決定して、決定次第公布してくれるかな。

僕はとにかく、急いでいるんだよ。

権力が大きい方が、人が集まりやすくて早く済みそうだから、早く

利用したい」
そう言うと彼はまた来たとき同様扉を自ら開けて出て行った。
嵐のように。
でも、その直前の言葉と一瞬見せた瞳には、本気の色が強かった。
（焦っているの？）
あんたが？
（信じられない）
むくむくと興味が湧いてきた。
（あんたは何に焦っているの？あんたが言った“彼女”って何？）
まさか！
（あんたの特別は・・・人間なの？）
それも、女性？
「はっ」
私は笑った。
（これは大変なことになるわね）
国にとっても、

彼にとっても、
そして。
まだ、見も知りもしない、彼女、も。
（会ってみたいわ）
美しい火薬と火薬の調合による火の花。
それにしか心奪われない私だけれど、でも、ちょっと興味がわいた。
だって、この一族の血をあれだけ色濃く受けていながら
、何にも興味がわかなかった哀れなあの男が、
一族としてはこれもまたありえないことに、
今頃になって、ついに一族ならではの〇〇バカになったのだ。
これで気にならないはずがない。
私は笑った。
あの男は、全てを手に入れるために、動き出すだろう。
そして、彼にはいずれ、自分の力も必要になるはずだ。
（早く来なさい）
そして、面白いものを見せて頂戴。

ざわめく会議室で、私は一人、まだ見えぬ未来を想像して笑みを浮かべていた。

いつか、必ず訪れるであろう、出会いに思いを馳せながら。

小さな星の行く道は（2）

「違う。ミカ、でしょう？」
「！」

一度聴いたら忘れられない甘くて優しい声。
振り返れば、そこには優しく微笑むミカ様が。

「ミカ様。どうしてここに！」
「アリシア」

優しいけれど、咎めるような声に、私は慌てて口をふさぐ。
そんな私に近づき、ミカ様は口をふさぐ手を優しい力でほどかせた。

「思っていたんだけれど。アリシア。心の中では僕を様付で呼んでいるでしょう？」
「！」
「やっぱり」
「どうして」
「とっさに出る呼び方は、心の中で呼んでいる呼び方になるものだから」
「あ」
「僕を呼び捨てにしてというのは過ぎた願いなのかな」

悲しそうにそう言われて、私はぶんぶんと首を横に振った。

「そんな。ただ、恐れ多くて」
「・・・」

ミカ様が切なげな瞳で私を見つめる。
まるで、捨てられた子犬のような心もとなくて、さびしげな瞳。

「ミ・・カ」
「そうだよ」

さらりと頬を撫でられる。

「そんなふうに切ない瞳で僕を見て。
アリシア。僕にどんなおねだりをする気？」

「え？」

「僕にしてほしいことがあるんでしょう？
君に、したいことが出来たんでしょう？」
「！・・・はい」

一瞬言葉に詰まったけれど、私はミカ様をまっすぐに見つめて答えた。

「私はミカに大きな舞台を用意して頂きました。
でも、私に出来ることは、その舞台の上では何もない気がするのです」
「・・・」
「だから、私は自分の手が届くところで、
自分の出来ることをしたいと思ってしまったのです」
「やりたいことが見つかったということだね」
「はい」
「じゃあ、答えは簡単だよ」

「・・・」
まっすぐにミカ様を見つめる。
ミカ様は感情の読めない瞳で私をじっと見つめられた。
「心の中でも僕をミカと呼べばいい」
「えっ？」
くすり、とミカ様が微笑む。
「対価交換だよ」
「それは」
「それが、対価なんだ」
全く割に合わない気がするのは、きっと気のせいではない。
それなのに。
「僕の言うことが信じられない？」
「いいえ」
「なら、取引をしよう。アリシア。
僕が君に差し出すのは、『僕が用意した舞台はそのままで、君は君がしたいことをしていい』」
「それは」
私が困惑するとミカ様は諭すようにゆっくりと口を開く。
「アリシア。君がしたいことはきっともっと大きくなる。
現場を見れば、必ずね。
でも、大きなことをするには、権力は必ず必要になってくるんだ。
だから、舞台はそのままにしておいた方がいい。

勿論、君が嫌だというのなら、いつでも、いくらでも、終幕してあげるよ。
だから、安心して」

にこりと微笑まれる。
私はミカ様の言葉を口に出して反芻した。

「大きなことをするには権力がいる」

そうだ。

ミカ様でさえも、第一王位継承権を求められた。
私がしようとすることはそんなにも大きなことではないと思う。
でも、ミカ様はいずれ必要になるとおっしゃった。
現場を見れば、とも。

（世間知らずな私が、ミカ様の助言を無視するなんて、
それこそ、恐れ多い上に、無能な判断だわ）

「でも、ミカ。それでよろしいのですか」
「君のためだけの舞台だよ。僕の労力は全て君のためにある。
だから、受け取ることこそが、僕に報いることになるよ」

にこりと微笑まれる。

「ありがとうございます・・・！」

申し訳ない気持ちでいっぱいだけれど、
ミカ様は謝罪何て求めていらっしゃらないと、
少し、ミカ様のことがわかってきた。

だから、心からのお礼の言葉を返す。
「どういたしまして」
ミカ様は嬉しそうに微笑み返してくださった。
その綺麗で、かわいらしい笑顔に、私の心臓がトクリと一つ高鳴る。
（？）
鼓動の変な高鳴りに疑問を持ったけれど、病気ではないだろうと無視する。
「それじゃあ、対価をもらおうか。アリシア」
「心の中でもミカとお呼びする、ということですか」
「そうだよ」
「わかりました。お見せすることは出来ませんが、約束を守ると誓います」
「うん」
「ミカ。でも、私のお願いは」
「自由に行動することだね」
「はい」
「いいよ。思うとおりにやってみればいい。
ただし、もう一つ約束して。
黒の御使いの名は君のものだから、
ためらわず、好きな時に好きなように使うんだよ」
「それは、あまりにも私にとって虫のいい話です」
「それが僕の望みだって言っているでしょう？」
「・・・わかりました。ありがとうございます」

「アリシアの明日からの行動は全て自分の判断でやっていけばいいからね。
配給の仕事を続けるもよし、そのほかに努めるもよし」
「はい。ありがとうございます」
「うん」
「あの・・・ミカ」

私はとても躊躇った。
でも、感謝を示すのに、
これをするのは、世間では一般常識だし、皆していることだし・・・。

私は意を決して顔を上げた。
ミカをじっと見つめ、

「少し、じっとしていてくださいね」

お願いしてから、

ちゅ。

「・・・ありがとうございます、の気持ちです」

かああっと頬が赤くなっていくのがわかる。
ミカの顔を見ることなんてできなくて。
「あの、パンがなくなったので、新しいのがあるか見てきますね！」
私はその場から逃げだした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2021q/

黒髪の少女

2011年9月11日21時58分発行